

現代韓国の円仏教における「教団葬」の儀礼

曹 起虎[※]

はじめに

日本の著名な民俗学者である井之口章次の『人生儀礼（講座 日本の民俗3）』（昭和53）に述べられている「祭儀・祝祭というものは、宗教の行為的側面であり、宗教を、単に靈的存在（Spiritual Being）への信仰とする定義は狭すぎ、宗教の一面しか捉えていない」という論理に筆者は同感する。さらに、井之口章次の儀礼に対する研究に重きを置いた点が優れていると判断する。一方、儀礼¹（ritual）には必ず信仰や聖観念、神聖観念を伴ない、「世俗的儀礼（Secular Ritual）」といわれるものもある²ということにも同じ考えを持つ。

井之口章次は、同書を通して、儀礼のうち、葬送儀礼に関して、

葬送・墓制の研究は、近来すこぶる盛んである。³多くの事例が集積され、論著も次々に、公にされている。それにもかかわらず、未解決の問題は多い。むしろ研究が進んだために、未決の問題点を浮きぼりにされてきた、と見るべきものかも知れない。私は葬送儀礼をとらえるにあたって、遺体の処理と靈魂の処理との、双方を扱うべきだと考えている。（中略）したがって埋葬前後の儀礼だけを扱うのではなく、①生死の境、②いわゆる葬式、③墓制、④死後の供養、の全般を見わたすことにする⁴。

と葬送儀礼に関する問題点を指摘している。

筆者は、以上の引用文の①から④までの事項について本論文の研究範囲を定め、研究方法は、由谷裕哉氏（2004.8）が民俗学の研究動向として「信仰一世紀の変わり目における信仰・宗教の研究—⁵」で提示したことに従う。つまり、筆者は以上のようなコーパス（corpus）を円仏教の葬送儀礼とし、さまざまな円仏教の経典を参照し、病院・斎場・調査対象地域における円仏教と関連されるさまざまな葬儀の現場を直接訪ねて、フィールド調査やライフ・ヒストリーに関する調査を行った。

韓国の民俗学者でもあり、国立民俗博物館の学芸研究官である張長植^{チャン・ジョンシク}は、「韓国民俗の歴史と展望に関する省察」（2005）をとおして、韓国の民俗学の出発の熾烈性という冒頭において、「韓国民俗学の胎動を李朝朝鮮後期に現れた『実学^{シルハク}』にみる研究成果を認めないわけにはいかないだろう⁶。」と印權煥^{インクワン}の『韓国民俗学史』（1978）の内容を引用しているが、実学の学問的な性格とその範疇が、民俗学の求める内容と軸と一にしているからである。

それゆえに、韓国の多くの研究者たちは朝鮮時代後期の「実学時代」をもって韓国民俗学の濫觴期⁷とみなしているのである。この直前である1860年崔濟萬^{チュイ・ジマン}⁸（1824-1884）はすでに朝鮮半島

※神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程

に上陸していたキリスト教（カトリック⁹）が儒教的な倫理に支配されてきた民衆たちによって抵抗されると、「濟世救民」・「人乃天^{イネチヤン}」という思想の下で創られた「東学^{トンハク}」に反する「実学^{シルハク}¹⁰」の時代を迎えた、と言った。

この「実学」というのは、朝鮮時代後期の社会改革思想としての既存性理学が現実問題を解決できなくなったことに対する反発があり、^{チョングギョン} 丁若鏞¹¹（1762~1836）などによってできた思想であると、よく言われる。

あらゆる宗教と同様に、韓国で創立された一つの新宗教¹²である「円仏教¹³」としても、それを中心とする葬儀というものがあり、大部分の宗教学者が認めているように、葬儀という分野が宗教生活の大部分に位置づけられている面もあるということは、円仏教においても当然のことであると思う。それゆえ、円仏教における葬送儀礼がかなり重要視されている。それは、円仏教のさまざまな教書に葬儀に関係のある内容が掲載されているし、教祖である少太山の大涅槃当時の葬儀から今日の葬儀に至るまでのそれらを見ても、円仏教のあらゆる機能の中でも、その儀礼が重要な役割を果たしていることは明らかである。

筆者は、韓国の円仏教における「教団葬」の葬送儀礼の変容について、なるべく全羅北道^{チョン}全州^{ジュ}・益山^{イクサン}・群山市^{クンサン}で行なわれる葬儀を事例としようとする。これらは、南根祐（2009.8）の「韓国民俗学の現在¹⁴」と李承洙（2009.8）の「韓国における現在の民俗学状況¹⁵」に従って韓国の民俗学的な立場を考えながら、实际的に探りたい。

本論文における円仏教に関する研究範囲は、前述の井之口章次の引用文を生かして、円仏教の「教団葬」としての葬儀の原理と葬儀の実際、斎、祭祀、二斎、教義という内容に限定する。そして、円仏教の教団葬の実際面を探るために、筆者が事例として取り上げるのは、円仏教徒であった金明煥（女、1931-2009）宗師と円仏教役者であった李済性（男、1935-2009）宗師である。このように二人の故人を取り上げる一番重要な理由は、「教団葬」なのに、二人の故人たちのフィールド調査が部分的に行われたからである。要するに、筆者は「故金明煥霊駕」と「故李済性霊駕」の葬儀を通してフィールド調査による非文字資料を提供することができるからである。一方、葬送儀礼を調査するには研究倫理が必要であると考えられ、実際の現場でフィールド調査を行なう時には、故人や遺族、そして葬祭業者らをめぐるさまざまな葬祭に参加しながら、研究倫理に注意すべきであると思う。この「研究倫理」に関して、山田慎也氏は「現代における葬送儀礼調査と倫理」を通して、現在さまざまな場で、論議が行なわれる社会問題となっていると指摘している。（中略）筆者に求められているのは、専門とする死と葬制の研究に関する民俗調査と倫理の問題である¹⁶と明らかにしている。

本論文における「故人」として事例となっている死者は、前述したように金明煥（女）教徒と李済性（男）教務という人物である。2009年故人となった二人は生きている時、円仏教に貢献したところが大きかったので、「法位等級¹⁷」において死後「宗師位」というレベルまで登られたから、円仏教の「教団葬」に該当したわけである。ところで、教祖の少太山の大涅槃（1943）以後60余年間数多くの円仏教の方々が涅槃したが、その間、韓国の経済的な発展とともに円仏教

においてもいわゆる「葬儀の変容」ないしその「復興」ができたと思うしだいである。

したがって、筆者は、さまざまな円仏教の経典を参照し、ホスピス病院・斎場・調査対象地域における円仏教の現場・火葬場・墓地、そして必要な場合には奉安堂などを直接訪ねて、フィールド調査やライフ・ヒストリーに関する調査を行った。そして、可能な限り、葬儀に関わる施設の地図や写真を添付する。

1. 円仏教の生死観

本論文においての少太山ソテサンと鼎山ジョンサンの生死観については、円仏教の教祖である少太山の言行録である『円仏教教典』の「大宗経」の薦度品の内容をはじめ、『円仏教礼典』や鼎山の言行録である『鼎山宗師法語』のなかの「第二部 法語」の生死編を中心に考察する。

まず、家礼や教礼のあらゆる礼法に関する手順がまとめられている『円仏教礼典』の総序編には、次のようにある。

古の聖人は「礼は天理の節文であり、人事の儀則である」といっている。人間にも礼がなかったとすれば、最靈としての価値を失い、公衆道徳や社会秩序の維持もできなくなるのであるから、礼法を定めることが人類の生活に如何に重要な意味を持つかは贅言を要しないのである。(中略) 礼の根本とは何か。第一には、広く敬うことである。第二には、いつも譲ることである。第三には、寛容であることである。(中略) 円仏教においては、これ等種々の点を参酌し、新旧を問わず必要な礼法を選んでまず通例の法を明らかにした。次いで、時代の推移に適応しかつ公道を本位とする家礼と教礼のあらゆる手順を順次明らかにして、ここに礼典を編纂したしだいである。この礼典の通りに正しく実行すれば、誰でも礼の本末が併せ得られると共に世の発展向上にも一助となるであろう¹⁸。

ところが、「円仏教」の死生観がもつ意味は、韓国の「伝統的既成仏教（以下、「仏教」と表記する）」におけるそれとは、多少の差があるという前提がある。なぜならば、これは今日韓国において「仏教」と「円仏教」の異同の範囲をどこまで意味づければよいのか、という問題と直面するからである。もちろん、これらについては、「仏教」と「円仏教」の差異と共通点を明らかにすべきであろう¹⁹。さて、筆者は、『円仏教教典』をはじめ、少太山の首弟子である第2代の宗法師の鼎山宗師ソンキョフ（宋奎、1900—1962）と関連のある『鼎山宗師法語』、さらに、『円仏教礼典』などの円仏教の数々の書籍を参照し、「死」の意識と死後認識を考察することによって、少太山と鼎山の生死観といえる円仏教における生死観を探ってみることにする。

(1) 少太山の生死観

『円仏教教典』の「大宗経」の因果品1章には、「宇宙の真理は、元來生滅がなく永久に巡りめぐるので、去はすなわち来になり、来はすなわち去になる。(後略)²⁰」と語っている。これは、「因果」という原理についての法語であるが、「宇宙の真理」という言い回しこそ森羅万象においての真理であることを考えるほど、人間の生命にも関わりのある問題であると解釈される。要するに、人間の生滅も宇宙、すなわち、森羅万象の成・住・壊・空の原理のように、万物の

中の人間の生・老・病・死も四季の春・夏・秋・冬のように巡りめぐる理であることを示唆している。

以上の内容に基づいて、少太山の言行録である『円仏教教典』の「大宗経」における薦度品1章には、

凡人たちは、現世の生だけを大事だと思っているが、知見の開けた人々は、死に対してもまた一大事であることを知っている。そのわけは、人はよく死をまっとうしてこそ、後生で善道に生まれてよく生きることができる。よく生まれて、よく生きる人こそ、よく死をまっとうすることができるという内容と、生は死の本であり、死は生の本であるという道理を悟るからである。ゆえに、この問題を解決するには、老少にかかわらず、年が四十を超えれば、死へのしたくを始めてこそ、死ぬときにせわしい歩みをしないですむであろう²¹。

という内容があり、この引用文を通して円仏教の生死観の一面が考えられる。ここで、少太山は、「よく生まれて、よく生きる人こそ、よく死をまっとうすることができるという内容と、生は死の本であり、死は生の本であるという道理を悟るからである。ゆえに、この問題を解決するには、老少にかかわらず、年が四十を超えれば、死へのしたくを始めてこそ、死ぬ時にせわしい歩みをしないですむであろう。」と言及している。これについて韓国ジユグン（奇愚、死）学会長の崔ジュンシク²²は、特に「年が四十を超えれば、死へのしたくを始めてこそ、死ぬときにせわしい歩みをしない」と強調したことには、あらかじめ、人間としての「死の準備」ないし「死の準備教育」の重要性をいくら強調しても過言ではない²³と述べている。勿論、こういう考え方は円仏教の教役者と教徒なら誰でも持っていると思う。なお、『円仏教教典』の「大宗経」薦度品2章には、

人間は生まれると、いつかは涅槃の時期がくる。今日は、諸君のために、誰かが涅槃に入る際に、近親者としてその靈魂を告別する方法と、涅槃に入る本人として、みずから取るべき方法を聞かせて上げよう。もし人間が、急病とか不意な事故のため急死したとか、または、もとより信心を持たず指導に従わない者には、この方法をいちいちに施しにくいが、不意な死亡でなく、また少しでも信心をもつ人には、この法を施せば、最後の心をより堅固にし、靈魂救済に大きな助けとなるであろう。臨終が近づけば、近親者は、第一に、病室にときどき香をたき、室内をきれいにせよ。もし不潔であれば、病人の心も、不浄になれるであろう²⁴。

とあり、「最後の心の堅固さ」と「靈魂救済に助けとなる方法」、そして、臨終²⁵が近づける時、「近親者の注意事項²⁶」を明らかにしている。それゆえ、少太山は、同3章を通しては、臨終者としての注意事項を強調する。

臨終の病人は、みずから臨終が近づいたことを悟ったならば、万事をことごとく放念して、ひたすら精神の統一につとめ、遺言を残したいときは、あらかじめ、済ませて、さっそくその観念から離れて、精神統一の妨げにならないようにせよ。精神統一のほかにもまたと緊

要なことはないからである。また、みずからよく考えてみて、平素、だれかに怨みとかあだを結んだことがあれば、相手を招いて、これの解消に努めるようにし、もし本人がいないときは、せめて、自身独りだけで、その怨恨を放棄するように努めよ。もしそのようなことが達せられないと、それは来世の悪い因果の種になるのである。(中略) ゆえに諸君は、この道理を前もって覚悟して、急に臨んで及ばないくやみを残さないようにすべく、以上の諸事項を常に念頭において、靈魂の去来に大なる執着がないようにせよ。人の生死は一大事であるから、すべからず慎重にしなければならないのである²⁷。

としている。それから少太山は、同4章を通しては、円仏教の葬儀に必ず暗誦され、引導(薦度)のための呪文である「聖呪」、すなわち、「永天永地永保長生、万世滅道常独路、去来覚道無窮花、歩々一切大聖經²⁸」(写真1)を述べている。さらに、次の5章には、

某よ、精神をまとめて、私のことづけをよく聞かれよ。善悪いずれにせよ、そなたが現世に受ける業は前世の宿業の報いであり、現世につくる業は来世に受けるべき業となる。これがすなわち大自然の天業である。(中略) み仏もそなたも、一切衆生も、生死の理はみな同一であり、また、すべて同一な本然清浄の性品²⁹であり、円満具足の性品である。(中略) 万物は生、老、病、死にしたがって、六道、四生に変化し、日月は往来して昼夜を変化させる。これと同じく、そなたの六体の生死もまた、変化はされるが、生死ではない³⁰。

という内容があり、これは、円仏教においていわゆる「薦度法門³¹」の基礎となっている。さらに、次の6章には、

我々は、口ぐせのように、生死苦楽から解脱しようというのだが、生死の原理を悟らないと、解脱は思うようにならないだろう。(中略) しかし、その原理を悟る人は、この身が生まれて一度死ぬのは、ころもがえをするのと等しく、変化に伴う肉体は今死ぬといえども、不変な昭々たる靈識は永遠に消滅しないで、さらに新しく受生する³²。

とある。

以上の三つの引用文を通してたやすく理解できるのは、円仏教の死生観が、第一に円仏教の教祖である少太山の生死に対する見解であるということである。したがって、少太山の「死」の意識は、こうした観点から出発しなければならないと思う。

一方、『円仏教典』にある薦度斎チヨンドジエ(供養法事)の一つである終斎³³の「祝願文」には、

特に今日この四十九日は、涅槃人〇〇〇が中陰から去って行く重要な期日ですが、いまだ修行の浅い衆生界において如何に自力による天業突破を望み得ましょうか。(中略) 涅槃人の靈根に少しでも業障が残っておれば、真如の法力でこれを清掃し、その靈路を無明が遮っておれば般若の恵光で導き、邪見を捨てて正見を持ち、(中略) ただちに仏土樂地に立ち戻り、生を受けるたびに人の身を失わず、三世を通じて、道德の因縁から離れず、正法の修行に末長く精進し、遂に成仏済衆の大果を成就するようにしてください³⁴。

としている。

ここで注目されるのは、「生を受けるたびに人の身を失わず」という言い回しにおける、「人

の身」という表現である。なぜなら、ここでは何よりも、亡くなった「死者」が来世にこの世に戻れるように祈願しているわけである。このような生死の観念に関する言い回しは、円仏教における生死の観念を代表的に表わしている。つまり、これらが少太山の（ひいては円仏教における）生死観であるわけである。

(2) 鼎山の生死観

一方、少太山の影響を大いに受けた鼎山は、『鼎山宗師法語』を通して自分の死生観を語っている。『鼎山宗師法語』は親著である「第一部 世典」と言行録である「第二部 法語」で構成されている。

その中で、鼎山は、「薦度の定義」と「薦度の道」を明らかにしている。それでは、鼎山が明らかにしている薦度の定義と薦度の道を引用してみる。鼎山は「第一部世典」を通して、薦度の定義について、

薦度というのは、悪人を善人に帰らせ、低い処から高い処へ引き上げ済度することである。自分自身が自ら薦度を受けることもある³⁵。

としている。

薦度の道は、第一に仏縁を結ぶことである。正法会上に因縁がないと薦度が受けにくいので、まず、仏縁を結ぶべきである。第二に信仰を立てることである。(中略) 第三に悟りである。(中略) 第四に功德を積むことである。(中略) 第五に一心を清浄にすることである。一心が清浄な根本功德を心得て、普段世の中の五欲に染まらず執着しないでこそ、功德が功德通りに肥料となり、生死去来にも自由活潑になり、生々世々絶えず薦度を得ようになるのである³⁶。

と薦度の道を明らかにしている。

つづいて、鼎山は、『鼎山宗師法語』の「第二部 法語」のなかの第十四生死編の一章で、

生死の大事を解決するのに三つの段階がある。第一は、本来生死がなく生と死が二つではない境地を悟り知ることであり、第二は、本来生死がなく生と死が二つでない境地に受けついで、守るのであり、第三は、本来生死がなく生と死が二つでない境地を施し活用するのである。この三つの段階の実力を具備して始めて生死の大事を完全に解決したといえるのである³⁷。

とある。以上の引用文で、鼎山は、「生死」という大事なことを解決するのに三つの段階があるので、その段階をきちんと守らなければ生死の大事を完全に「解決」することができないと述べ、生死の大事を解決する方法を提示している。続いて、鼎山は、

生死の去来に三つの根気の差がある。第一は、愛着貪着に引かれて去来する根気である。去りまた来る途中に正見を成し得ずいつも顛倒し、近寄り次第受生して酔生夢死し、または怨恨とか憎悪に引かれて悪道に墮落するのである。願力を立てて去来する根気である。正法会上に徹底した信念と発願をもって平素修行をなし最後の一念を清浄にすると、去りまた来てもみ仏様の会上に訪ね入るのがまさに磁石に鉄がくつつく如くである。第三は、

心の能力をもって生死を自由にする根気である。これは徹底した修行の結果、三大力を円満に得た仏菩薩聖賢達が六道去来を意のままにせられるのをいうのである³⁸。

としている。この引用文をとおしては「生死の去来」には三つの根気があるが、三つの根気の差をあらかじめ把握し、修行を徹底にすれば、「三大力³⁹」の重要性を悟れると強調している。

そして、鼎山は、人が死亡すると生まれかわるものなので、必ずやよく「薦度」される必要性を述べている。それでは、次の引用文を見ることにする。

薦度というのは、霊駕をして離苦得楽せしめ、止要修善せしめ、転迷開悟せしめるものがある。一心が清浄して薦度すべき処なきまで薦度するのが真の薦度となるものである。我々の心は無形のものであるが、一心になると宇宙の大きな気運に合致するので、修道人達が清浄道場に集まり至誠を尽くして祝願をあげると、霊根も感応され容易に薦度をうけるようになるものである。故に子孫なり後人が涅槃人のために行なうべき最も重要な事の中の一つである。しかし、単に到済行事だけが万能ではなく、一番重要な事は本人が平素に本人の薦度のために積功することであり、後人達も行事にばかり止まらず、常に涅槃人の功德が永らくこの世に及ぼすようにするのが、また薦度の重要な条件となる者である⁴⁰。

結局、少太山と鼎山の「死」の意識そして「薦度」の重要性にみる円仏教の生死観は、仏教の伝統を継承したといえよう。さらに、既存の伝統的な思想を統合するという立場からできた少太山の「死」の意識と生死観は、少なくとも、韓国社会においての死後に対する伝統的な認識ないし生死観の投影をうかがえるところもあるといえよう。

一方、円仏教には、「四祝・二斎」という行事があり、これらがとても大事に行なわれるが、葬儀の原理と実際を見てみると、円仏教の人々（円仏教の教徒と教役者）が亡くなると、葬儀の原理を基にして葬儀の実際が行なわれる。これに関しては『円仏教礼典』に、護喪・入棺（大斂；デリョン）・入棺式・告別式（発鞞式）・出棺葬列・安葬式などが掲載されているが、これらについては後述する。

2. 円仏教の喪葬における「教団葬」の原理

(1) 教団葬について

『円仏教礼典』によると、「『教団葬⁴¹』とは、円仏教教団が喪主となって葬儀の費用と儀式を受け持ち行なうもので、これは一生をもっぱら円仏教に貢献した専務出身者と、期限付き専務出身者でありながら執務の途中で亡くなった人に対して行なわれる死後の礼遇法の一つである⁴²。」だから、期限付き専務出身者が期限を終えた後涅槃に入った場合や、居塵出塵有功者の葬儀についても、儀式だけは円仏教教団で主管し、教団全体葬・教団連合葬・教堂葬等の等別を合わせて教団葬と総称するという解釈ができる。

(2) 教団葬儀委員会の役割

教団葬儀委員会の役割について、『円仏教礼典』には、「教団葬に該当する有功者が涅槃に入

ったら、中央本部または該当教堂で遅滞なく、教規による葬儀の等級を決め、その等級に対する葬儀委員会を組織して一切の行事を行なう。したがって、葬儀委員会は、葬儀に関する一切の部署、たとえば、内務・外務・応接・儀式・喪具・葬役・会計・記録等を分担し、公・私共に関係のある人たちに計を知らせ、葬儀に関する一切の礼式を迅速に関係教堂と各機関に知らせる。涅槃式・告別式・入葬式・斎等の手順や例文などは「家礼編」に定めたところに準ずるが、どの行事でも常に公家の喪主が私家の喪主に先たち、告辞・祝願文等の朗読順も教団名儀のものを主とし、涅槃標識旗も主管教堂に立てるのを原則とし、告別式の弔歌と終斎の慰霊歌（聖歌44章）は教団連合葬以下は慰霊歌と教団葬弔歌（聖歌52章）を適用するが、教団全体葬では状況にふさわしく新たに作成して使用する。葬儀委員会は四十九日目の終斎の時それまでの諸般の行事の経過と葬儀費用の収支内訳を報告した後解散する⁴³。」としている。

(3) 教団葬の手順

『円仏教礼典』に明らかにされている教団葬の手順は、「教団葬は元成績特等に当たる有功者に対する葬儀であり、中央本部が主管教堂となり、教堂と各機関の全幹部と教徒代表が葬儀に参席し、一般教徒は葬儀当日その地方の教堂や機関に集まって追悼および服喪の式を行ない、49日には終斎式を行なう。そして、教堂葬に該当する葬儀であっても特別に因縁のある他の地方や教徒は自ら進んで各自の地方教堂で追悼・喪服・除服の礼を行なってもよく、同志・団友等の関係で個人的自発的に服喪することとは制限しない⁴⁴。」とある。

(4) 喪葬について

人がこの世を去るのを見送ることは、喪葬と呼ばれる。だから、喪葬は人がその一生を終え、この世を去るのを見送ることで、近親者にとっては例えようもなく名残り惜しいことである。

当人にとっては、この世の体を捨て新しい体を得る時期であって、必ず、正しい薦度を得なければならない。したがって、その儀式には二つの意義が含まれているのである。

一つは、親戚・知人を主体としたもので、生前の懇ろな情愛を思いながら故人を送る形式を整えることである。もう一つは、当人を主体としたもので、真の涅槃と薦度を祈願することであるが、これはともに理の当然であり、そのどちらを欠いても完全な儀式にならない。しかし、そのなかでも主従を分けるとすれば、薦度が主で、形式は従とするのが望ましいという内容が大切である。

(5) 涅槃および涅槃式

涅槃を迎える前後と涅槃式を挙げる時には、次の事項に注意する。

- ① 人が涅槃に近づいた時は、本人やその近親者は「涅槃の道」を一層誠実に履行する。この場合、「涅槃の道」は、前掲書の『鼎山宗師法語』の「世典」に書かれている。それを引用すると、次のとおりである。

涅槃の道について、少太山大宗師におかれては人間が涅槃に入るに際してその親近者として靈魂を送る方法と、去り行く人間として自ら取る方法を詳細に言われているその法（『大宗経』薦度品2・3章⁴⁵）をつとめて実行すべきである。最期の時には、成仏済度の大願力を

更に固く立てて、清浄一念をもって去り行くべきである。「誓願はみ仏になって衆生済度に立て、心は清浄なる一念に戻り依持せよ⁴⁶」

とあるが、すなわちこれが「涅槃の道」の綱領となるわけである。

- ② 人が涅槃に入ったなら近親者は静かにその手足を伸ばし白布で屍体を掩い、室内を片付けて清浄にし、周囲は静粛にする。
- ③ 涅槃室内の空気を冷やし、屍体の清潔を維持する。
- ④ もし涅槃人の病気が伝染のおそれがある時には涅槃前から消毒に留意し、消毒や入棺が終わるまでは読経にあたる法師や弔客を直接屍体室に案内しないようにし、別に写真奉安所を設けてそこで読経や弔問をさせる。
- ⑤ 涅槃後一時間くらい過ぎたら、関係者が一緒に集まって涅槃式を挙行するが、坐鐘か揺鈴を一分間鳴らした後、開式・入定・心告、・聖呪（三唱）・薦度法門・読経・念仏・閉式の順序で涅槃式を挙行する。
- ⑥ 薦度法門は、原文本と敬語本の二種があるが、各々の場合にあわせて選択して使用し、法界正師以上の霊に対しては、教礼編教五節七項の場合を除いては初齋から終齋までの一切行事にその朗読を省略する。ここでは、二種の薦度法門について紹介する。

ここで、薦度法門について見てみよう。薦度法門の重要性こそが、円仏教の葬儀の分野において極めて大きな部分を占めるためである。この薦度法門によって、故人の来生が六道・四生のうちどちらに生まれ変わるかが決定される、と円仏教の教理の中では説かれている。円仏教の教理の中にある薦度法門の原型を以下に述べてみる。

「薦度法門（一）」は、涅槃前後に後生を引導する法説を仏の立場で衆生文体として、年少涅槃者に対して用いる。「薦度法門（二）」は、涅槃前後に後生を引導する法説として、丁寧な文体で年長涅槃者に対して用いるものであるが、ここでは、「教団葬」に当たる内容を紹介する方がいいと思われる。

薦度法門（二）：涅槃前後に後生を引導する法説⁴⁷

〇〇〇みたまよ、気をつけて仏の法説をよくお聞きとりください。善悪いずれにせよ、みたまが現世で、お受けになった業報は前世でみたま自身が作り出された業因によるものであり、現世で作り出された業因は来世にまた受けるべき業報となるもので、これがすなわち大自然の天業です。仏と祖師は自性の根本を覚得され、心の自由を得られているから、天業を突破して六道・四生のいずれにでも生まれ変わることを自由になさるが、凡夫と衆生は自性の根本を悟り得ず、心の自由を得ていないために、天業に引かれて無量苦を受けるようになるのです。〇〇〇みたまよ、一切万事すべてみたまが作り出したものであることをこれではっきりと悟られましたか。

〇〇〇みたまよ、さらにお聞きください。仏もみたまも一切衆生も生死の理は皆同一であり、本性もまた同じ本然清浄な性であり、円満具足な性です。性とは、あたかも大空輝く

月のように本物の月は大空にただ一つあるだけであるが、その月影は一千の江水に映るのと同じく、この宇宙と万物もその根本は本然清浄な性であり、名もなく形相もなく、去ることも来ることもなく、死にかつ生まれることもなく、仏と衆生區別もなく、虚無と寂滅もなく、無いという言葉さえも絶えたもので、有でも無でもないそのものですが、その中から「有」なるものが無爲にして化するがごとく自動的に生じ、宇宙は成・住・壞・空に変化し、万物は生・老・病・死を繰り返しながら六道四生に変化し、日月は往來して晝夜を変化させるのと同じくみたまの肉体の生死もまた、変化こそあれ生死ではないのです。〇〇〇みたまよ、よくお聞きとりになっていますか。性の本来をはっきりと悟りましたか。またお聞きとりください。

これからみたまはこの身を捨てて新しい身を受けるのですが、それはみたまが平素作り出した業因に従がって愛着が強い方に引かれて行ってその身を受けるようになるものです。その好むところが仏菩薩の世界であればそこで身を受けて無量の樂を得るでしょうし、反対に貪瞋痴が強ければそこで身を受けて無量劫を通じて無数の苦を得るでしょう。よくお聞きとりになっていますか。〇〇〇みたまよ、さらにお聞きとりください。この時に臨み心をなお一層心を堅持してください。もしも必ずかでも愛着や貪着が残っておれば自ずと悪道に陥るでしょう。一度この悪道に陥ってしまえばいつこの世に再び人に生まれ代わり、聖賢の会上に参加して大業を成し遂げ、無量の慧福を享受することができましようか。〇〇〇みたまよ、よくお聞きとりなさいましたか。⁴⁸

- ⑦ 涅槃式が終わるまでは泣哭の声を出不さない。
- ⑧ 涅槃式が終わったら幕等を張り回して屍体室を整理し、その前に写真を奉安して弔間を受け、時々読経、念仏等をする。

(6) 護喪

葬儀の全期間において護喪の保護と事務処理のために護喪所を設置し、親戚や親友のなかで経験のある人を選んで護喪と委員を決め、喪葬に関する内務・外務・応接・儀式・喪具・葬役・会計など一切の事を分担し、香奠録・弔客芳名録・喪中日記などを記録して後日喪主の備忘に役立つようにする⁴⁹。

(7) 入棺と入棺式

「教団葬」における入棺の手順と告別式と出棺葬列は、一般教徒の場合とほぼ同様に行われる。こうした手順は、『円仏教礼典』の内容通りに行われるためである。故人にはそれぞれ異なる面があるため、式順にも相違点があるが、大まかにその手順を紹介しよう。告別式は故人の遺影の前で、開式・着服・告由文・教団代表と喪主代表による告辞・心告・一同敬礼・聖呪一唱・薦度法門・読経・祈願文・閉式の順で行なわれる。

入棺および入棺式をする時には、次の事項に注意する。

入棺は、寿衣と棺が準備されたらすぐ行なうが、寿衣を着せる前に屍体を清め、着衣後屍体

を縛る旧習は止める。

入棺式⁵⁰は、開式・入定・心告・英霊に対する拝礼・聖呪・薦度法門・読経・念仏・閉式の順にする⁵¹。

(8) 告別式（発柩式）と出棺葬列

出棺は、特別な場合を除いては涅槃後三日目に行なうことを原則とし、式場は教堂または自宅と葬礼式場に設け、告別式は写真あるいは位牌の前で挙げる。式は、開式・着服・告由文・喪主代表告辞・心告および一同敬礼・聖呪一唱・薦度法門・読経、さらに祈願文・閉式の順である。式後ただちに出棺するが、葬列中カイト⁵²や哭聲は止め厳粛に進行する。出棺葬列では、涅槃標旗や花環などが靈柩の後に続き、喪主・親族・恩族等の関係者と一般弔客が秩序正しく列を作って進む⁵³。

(9) 入葬式および葬事

入棺が終わったら棺布をかけ、幕等を張って靈柩室を整理した後、その前に写真を奉安し、関係者が一斉に集まって入棺式を行なうが、式は、開式・入定・心告・英霊に対する礼拝・聖呪・薦度法門・読経・念仏・閉式の順にする。さらに、葬事の施行は、靈柩が葬地に着いた後、すなわち火葬の場合には点火後、土葬の場合には土を被せた後、入棺式を行なう。その式は、開式・心告および一同敬礼・聖呪（一唱）・読経・告別辞・閉式の順でおこなう。⁵⁴

3. 円仏教の喪葬における「教団葬」の実際

(1) 喪葬における「教団葬」について

教団葬を理解するために筆者が事例として取り上げるのは、円仏教徒であった故金明煥宗師と円仏教役者であった故李済性宗師であることは前述した通りあり、これからの写真は主として、「故金明煥靈駕」と「故李済性靈駕」に関するものを紹介する。金明煥教徒は、在家教徒として、李済性教務は教役者として各々円仏教の発展に非常に多方面に及ぶ貢献をした人物であった。それゆえに、全国の円仏教教徒であれば誰でも、以上の二人の生前の存在を知っているほどであった。

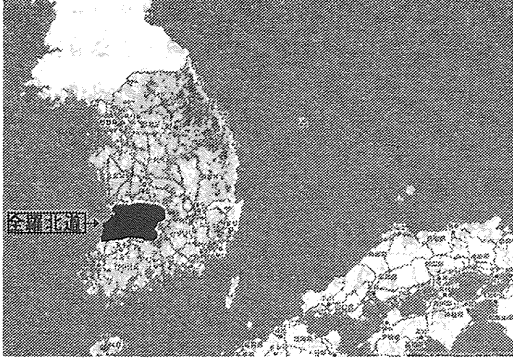
(2) 研究事例の対象者の二人の故人

本論文の研究事例の対象者の二人の故人は、故金明煥靈駕と故李済性靈駕であることを明らかにする。

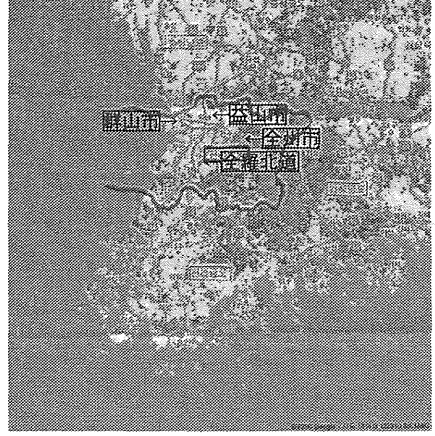
1) 故金明煥靈駕

まず、故金明煥靈駕の生前の略力と業績について記してみる。

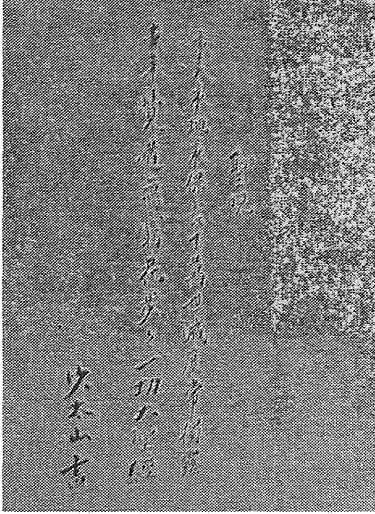
満陀^{マンダラ}円^{エン}金明煥宗師（写真2）が亡くなると、その法位は「出家位」と決まり、法勲は「円正師」となった。金明煥円正師は、1931年11月9日、全羅北道^{ジョングブ}井邑市で1男1女の長女として生まれた。母方の祖母が円仏教教徒であり、金明煥円正師は井邑女子高校生の時にその祖母の家に下宿をしながら高校に通った。その後、円仏教教徒である下宿の持ち主の李ヤンオンという人の勧めにより、1949（円紀34）年、益山聖地である中央本部にて円仏教に入教した。21才の時、李



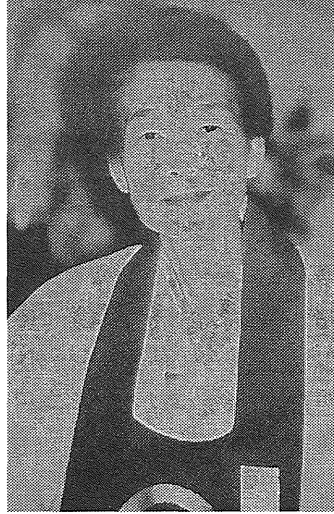
地图 1



地图 2



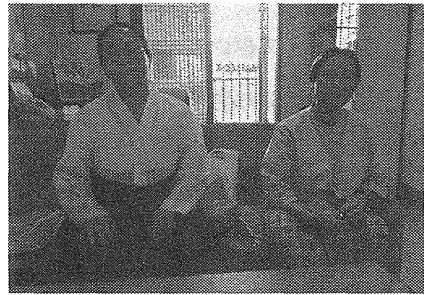
左写真… 1



左写真… 2



写真：3-A



写真：3-B

徹遠^{チロクエン}と結婚して3男3女の子を膝下におき、全羅北道の元平^{ウヘンピョン}教堂やソウルの鐘路^{ジョンロ}教堂などに通いながら祈りの生活を送った。続いて、自分の所有物を喜んで他人に施す布施心を実行し、変わらぬ精進積功を果たした。中央訓練院（現円仏教大学院大学）・ハワイ国際訓練院や鐘路教堂、ソウル市民禅房など数多くの教堂と機関を新築したことを認められ、1977（円紀62）年、「満陀円」という法号を受けた。その後も、至公無私な奉公人として暮す途中、老衰で2009（円紀94）年6月12日の午後2時25分、ターミナルケア病院である「円病院⁵⁵」（写真3）で涅槃に入った。以上のような一生を暮した金明煥円正師は、享年79才で法臘は61年、工夫成績は正式出家位であり、事業成績は正特等5号、元成績は正特等であった。それゆえ、中央本部は教団葬儀委員会を構成し、故人に対する葬礼の日程を知らせた。（写真4）ソウル教区の主管下において2009年6月14日、「教団葬」としての告別式を円光大学校内（株）薦度で行なった。故金明煥靈駕は在家教徒であったが、信仰心と修行力が深く広がったために、涅槃以後は教団葬の対象として「円正師」という称号を与えられた。

2) 故李濟性靈駕

次は、故李濟性靈駕の生前の略力と業績について記してみる。

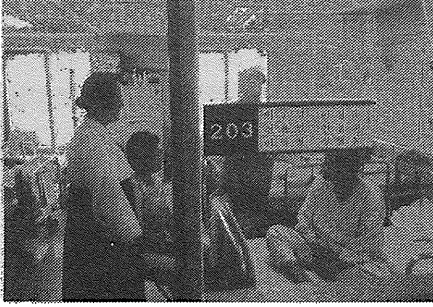
元山^{ウエンサン}李濟性宗師（写真5）の場合も、その法位は「出家位」と決まり、法勲は「円正師」となった。李濟性円正師は、1935年5月7日、全羅北道全州市校洞156番地で6男妹の中で3男として生まれた。小さい時から母が円仏教教徒であったので、母をともにしながら校洞にある全州教堂に通い、姉の李ヨンファの勧めにより1947（円紀32）年入教した。富裕だった家庭が韓国戦争（1950-1953）により貧乏になり、国家社会の思想的な対立と葛藤のなかで全州高等学校を卒業した李濟性宗師は、金九（1876-1949）の『白凡逸志⁵⁶』を読みながら国家社会に貢献しようと思ったが、香山^{ヒョクサンアンイジョン}安理正宗師の推薦によって円仏教の教役者を志願、1954（円紀39）年円光大学校円仏教学科に入学した。卒業後から、議政府教堂・カナダ教堂・ハワイ教堂・サンフランシスコ教堂・LA教堂などの海外で国際教化を担当、帰国してからは、ソウル西部教区長・全北教区長を歴任した。2004（円紀89）年に停年退任し、元老教務として誠心で精進するなかで、2009（円紀94）年6月1日、慶南教区^{キンヘ}の金海教堂の六・一大斉の行事で「苦楽に関する法門」をして、益山の中央本部に帰り、翌日の6月2日午前4時30分急に涅槃した。

(3) 教団葬儀委員会の役割

教団葬儀委員会の役割について、『円仏教礼典』に掲載されているようにある。教団葬に該当する有功者が涅槃に入ったら、中央本部または該当教堂で遅滞なく、教規による葬儀の等級を決め、その等級に対する葬儀委員会を組織して一切の行事を行なった。

したがって、葬儀委員会は、葬儀に関する一切の部署、たとえば、内務・外務・応接・儀式・喪具・葬役・会計・記録等を分担し、公・私共に関係のある人たちに訃を知らせ、葬儀に関する一切の礼式を迅速に関係教堂と各機関に知らせた。

涅槃式・告別式・入葬式・斎等の手順や例文などは「家礼編」に定めた所に準するが、どの行事でも常に公家の喪主が私家の喪主に先たち、告辞・祝願文等の朗読順も教団名儀のものを主



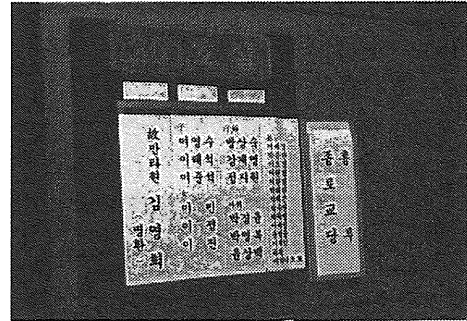
写真：3-C



写真：4



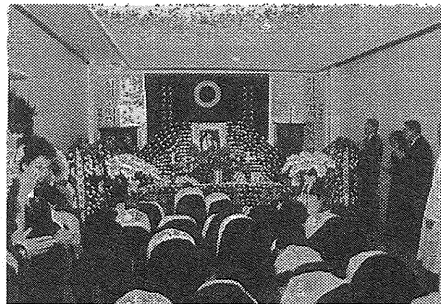
左写真
.. 5



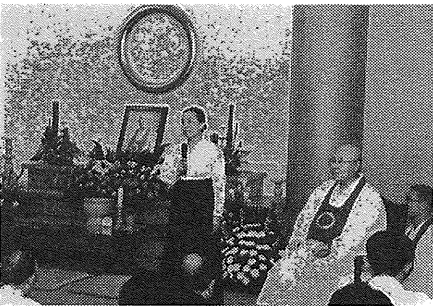
写真：6-A



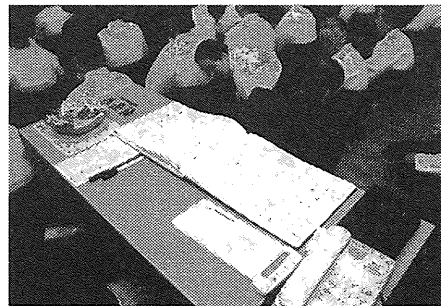
写真：6-B



写真：6-C



写真：7



写真：8-A

とし、涅槃標識旗も曹起虎の拙論（2011.3）の99頁の〈図1-(2)〉のようにする。主管教堂に立てるのを原則とし、告別式の弔歌と終齋の慰靈歌（聖歌44章）は教団連合葬以下は慰靈歌と教団葬弔歌（聖歌52章）を適用するが、教団全体葬では情況にふさわしく新たに作成して使用された。

葬儀委員会は四十九日目の終齋の時それまでの諸般の行事の経過と葬儀費用の収支内訳を報告した後解散された。

金明煥円正師と李濟性円正師の教団葬の際には、中央本部で教団葬儀委員会を速やかに構成し、教団葬の手順を踏んだ。教団葬儀委員会委員長を当時の李成沢^{イソンテ}教政院長が担当した。金明煥円正師（金明煥円正師と関連のある場合、以下では「前者」と表現する）の涅槃式（写真6 A-C）は円光大学の校内の齋場である「（株）薦度」に集まって行なわれた。李濟性円正師（李濟性円正師と関連のある場合、以下では「後者」と表現する）の涅槃式（写真7）は中央本部の香積堂において行なわれた。

(4) 涅槃式及び護喪

涅槃を迎える前後と涅槃式を挙げる時には、次の事項に注意する。『鼎山宗師法語』の「世典」に書かれている「涅槃の道」をきちんと守った。涅槃後一時間くらい過ぎた頃から、涅槃式が挙行された。

「前・後者」両方ともの式順は、坐鐘を一分間鳴らした後、開式・入定・心告・聖呪（三唱）・告辞・薦度法門・読経・念仏・閉式の順序である。「告辞」は、「前者」の場合は、在家教徒の代表と故人の長男が、「後者」の場合は出家教徒の代表と故人の長男が各々読みながら泣いてしまい、参加者たちの涙をさそったわけである。

耕山張^{キョンサンチヤンウンチョル}應哲宗法師は、「前者」の涅槃式において、「満陀円故金明煥円正師靈駕よ！「分かち書き」信誠円家同一体、満修法力宗勳塔、休休寂滅宝宮、千山万水涅槃樂」という内容の法門を、満陀円故金明煥円正師靈駕の薦度のために説いた。

「後者」の涅槃式は、中央本部の香積堂^{ヒョクシヨクダン}において行なわれた。耕山張^{キョンサンチヤンウンチョル}應哲宗法師は、この涅槃式において、「元山故李濟性円正師靈駕よ！ 濟行去来万仏所、猝然示涅槃寂寥、生死重依幾被脱、白雲散飛自在遊」という内容の法門を、元山故李濟性円正師靈駕の薦度のために説いた。

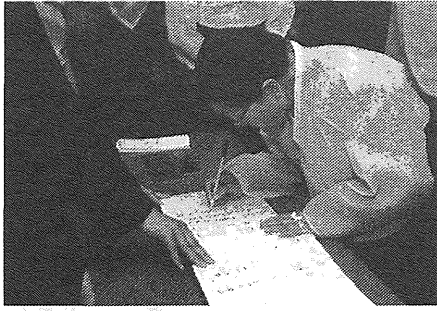
涅槃式が終わるまでは泣哭の声を出さないようにし、涅槃式が終わったら幕等を張りめぐらして屍体室を速やかに整理した。さらに、その前に写真を奉安して弔問を受け、時々読経、念仏等も行ななした。

「前・後者」両方ともの護喪と事務処理のための護喪所（写真8 A,B）が設置され、在・出家教徒、親戚や親友のなかで経験のある人が選ばれて護喪委員会が決まった。委員は喪葬に関する内務・外務・会計など一切を分担した。ついでに香奠録・弔客芳名録などを記録して後日喪主の備忘に役立つようにした。このようなことはほぼ教団葬葬儀委員会が決めた。

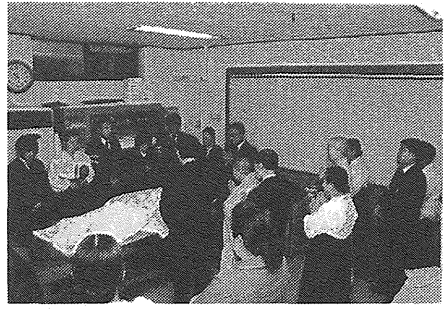
(5) 入棺と入棺式、告別式と出棺葬列

1) 入棺と入棺式

「前者」両方ともの入棺は、寿衣と棺が準備されたらすぐに行なうが、寿衣を着せる前に遺



写真：8-B



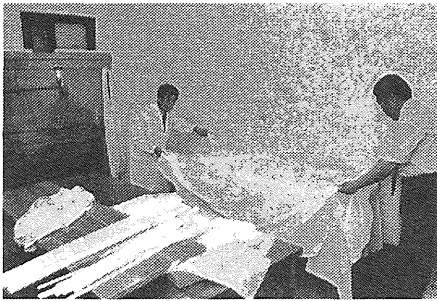
写真：9-A



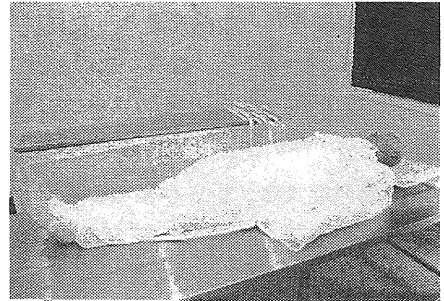
写真：9-B



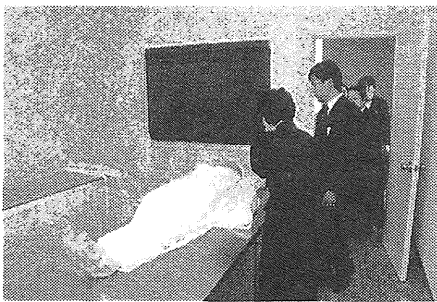
写真：9-C



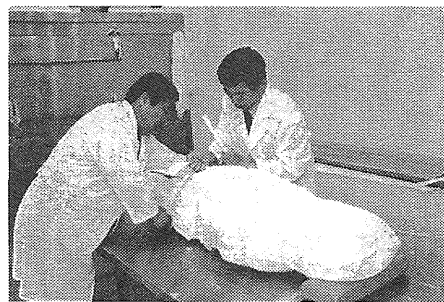
写真：10-A



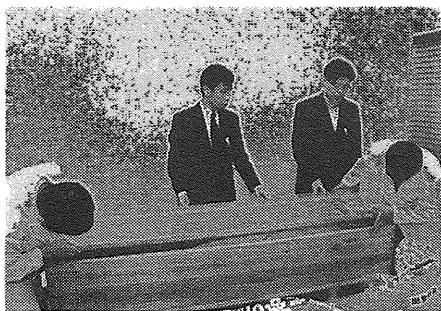
写真：10-B



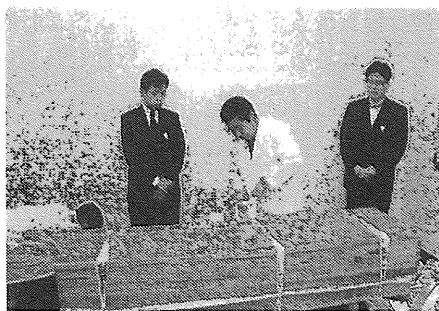
写真：10-C



写真：10-D



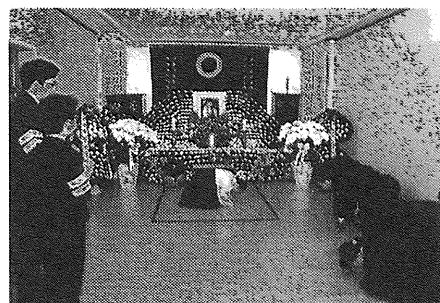
写真：10-E



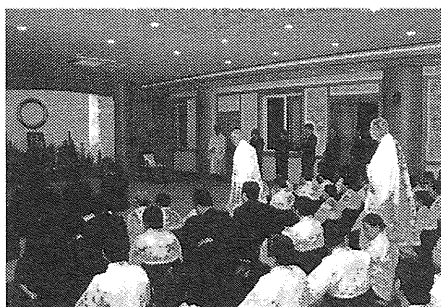
写真：10-F



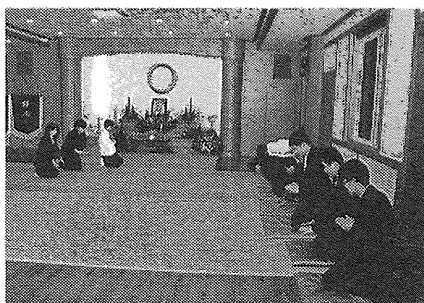
写真：11-A



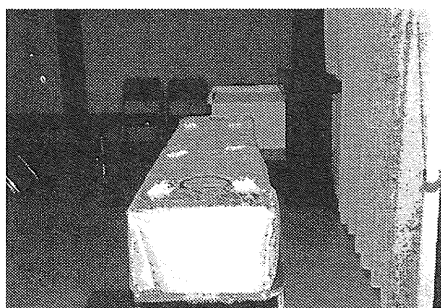
写真：11-B



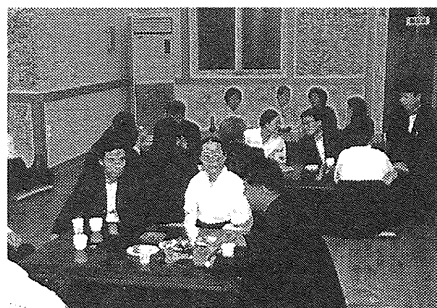
写真：11-C



写真：11-D



写真：12



写真：13

体を清め、着衣後遺体を縛って、なるべく旧習は避けた（写真9A-C）。

「後者」の場合の入棺の手順（写真10A-F）の後すぐ行なわれた入棺式は、開式・入定・心告・英霊に対する拝礼・聖呪・薦度法門・読経・念仏・閉式の順⁵⁸に行なわれ、入棺は涅槃の翌日に行なわれた。翌日、入棺の手順の後すぐ入棺式が行なわれた。遺族たちは入棺式の中で遺体が入棺された時には最も多く涙を流していた。一方、入棺式の前後、弔問客たちが斎場に参加、故人の完全な薦度解脱を祈ってから遺族たちにお礼をした（写真11A-D）。

「前・後者」両方ともに入棺が終わったら棺布（写真12）をかけ、幕等を張って霊柩室を整理した後、その前に写真を奉安してから涅槃式があった。つづいて、日本では「通夜」と呼ばれる「徹夜」（写真13）が行なわれた。

2) 告別式と出棺葬列

「前・後者」の告別式と出棺葬列は、一般教徒の場合とほぼ同様に行われた。こうした手順は、『円仏教礼典』の内容⁵⁹通りに行なわれた。

告別式の場合は、「前・後者」とともに中央本部の半百年記念館（写真14）で行なわれたが、式順は多少相違点があったが、大まかにその手順を紹介しよう。

告別式（写真15A-C）は故人の遺影の前で、開式・着服・告由文・教団代表と喪主代表による告辞・心告・一同敬礼・聖呪一唱・薦度法門・読経・祈願文・閉式の順で行なわれる。

ここで、薦度法門について見てみよう。薦度法門の重要性こそが、円仏教の葬儀の分野において極めて大きな部分を占めるためである。この薦度法門によって、故人の来生が六道・四生のうちどちらに生まれ変わるかが決定されると、円仏教の教理の中では説かれている。円仏教の教理の中にある薦度法門の原型を以下に述べてみる。

出棺は、涅槃後三日目に行なわれた。告別式後ただちに棺を出され、葬列中カイロや哭声はなのまま厳粛に進行した。「後者」の出棺葬列（写真16A-F）において、涅槃標旗（写真17）・遺影・花環等がつづき、霊柩の後には、喪主・親族・恩族・出家教徒・在家教徒等の関係者と一般弔客が秩序正しく列を作って進んだ。

(6) 入葬式および葬事

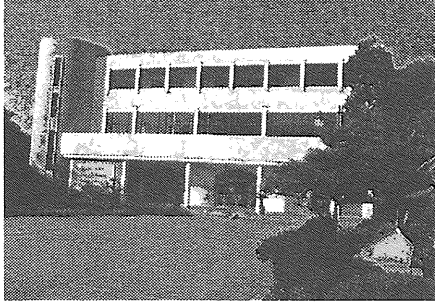
「前・後者」とともに火葬ではなく永慕墓園（写真18）の法勲墓域で土葬（写真19）によって安葬された。（写真20A-D）現代には火葬の方が盛んであるが、時代逆行の面があったので、多少惜しかった。安葬式及び葬事（写真21A-C）の施行は、霊柩が葬地に着いた後、入葬式を行なう。その式は、開式・心告および一同敬礼・聖呪（一唱）・読経・告別辞・閉式の順で行なわれた⁶⁰。

3. 斎

(1) 斎について

『円仏教礼典』に書かれた斎の内容は、次のようなものである。

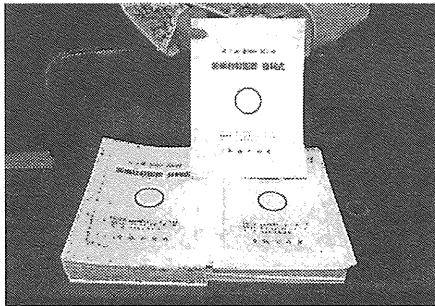
斎は涅槃人の薦度のために行なう法要行事であり、初斎から終斎まで七七献斎を続けるの



写真：14



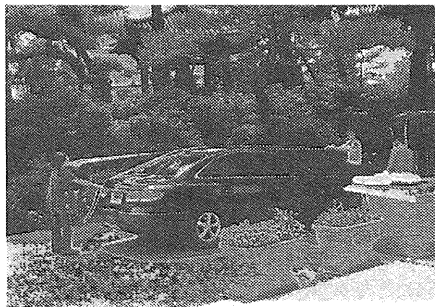
写真：15-A



写真：15-B



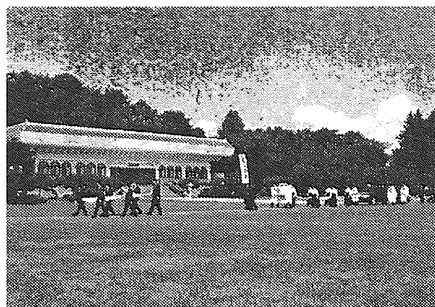
写真：15-C



写真：16-A



写真：16-B



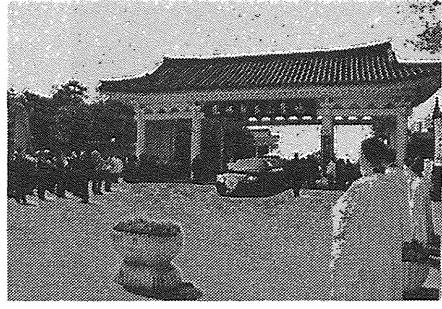
写真：16-C



写真：16-D



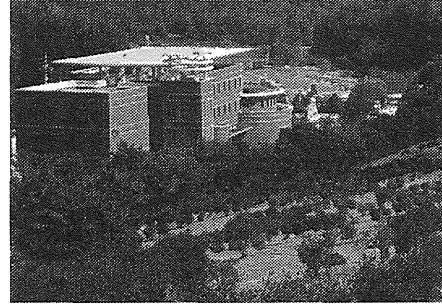
写真：16-E



写真：16-F



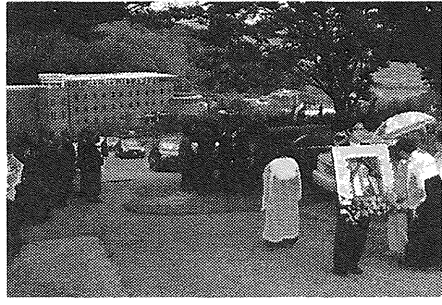
写真：17



写真：18



写真：19



写真：20-A



写真：20-B



写真：20-C

は、涅槃人の靈魂が大体約七七日（49日間）、中陰に留まった後各々その業縁にしたがって新しい体を得て再生するので、その間たびたび読経祝願等をして清浄な一念を養うようにし、残った執着心を解いて善道受生の因縁を深めると共に献供等で靈魂の冥福を増進させようということであり、またすべての関係者たちがこの期間中に追・居喪の礼を守ろうということである。それ故に齋を行なう者はこの二つの意義に留意してどちらにも落度のないように誠意を尽さねばならない⁶¹。

この齋について、円仏教の立場から見ると、死者の冥福を祈る薦度法会、あるいは盛大にささげる行為、または法会の際に僧侶や信者たちに対して食物をもてなす行為、身・口・意三業を清浄にすることによって悪業を造らないこと⁶²などとして解釈できる。韓国では、主として「薦度齋、供養法事」と呼ばれるが、これも円仏教の立場から見ると、死者の冥福を祈り、仏菩薩に齋を祭ること、靈駕が進級され浄土に入り来世に生まれ変われるように祈願する儀式として、理解できる。つまり、四十九日と同じ意味である⁶³。

(2) 初齋から七齋まで

「前者」の場合、はじめての齋、いわゆる「初齋」は、生前永い歳月をソウルで暮らし、さらに遺族として責任を果たしたことがあった地域がソウルなので、円仏教ソウル会館（写真21）でおこなわれた。したがって、本稿でも調査の対象はほぼ円仏教ソウル会館であった。

『円仏教礼典』には、初齋から七齋に至るまでの過程について、次のように書かれている。

涅槃日から七日目に靈位奉安所または教堂で初齋を行ない、その後な七日毎に七齋まで行なうが、式は、開式、入定、献貢および齋主拝礼、心告、一同拝礼、聖呪三唱、薦度法門（鬪文45）、読経および祝願文、半期服の除服拝礼、閉式の順にする。

初齋および七齋の祝願文は、告別式祝願文を準用し、初齋および七齋の式順中特別の場合には入定に続いて、法供の歌（聖歌46章）を、聖呪に続いて念仏七誦を、祝願文に続いて説法を行なってもよい⁶⁴。

しかし、初齋式から六齋式までは、喪主・親族・恩族・出家教徒・在家教徒等の関係者と一般弔客が参加する中で行なわれた。

まず、開式した後に入定がある。献貢および齋主拝礼の時に、喪主・親族・恩族・出家教徒・在家教徒等の関係者と一般弔客が壇上に登り、心告・一同拝礼・聖呪（三唱）、薦度法門（例文45）、読経や祝願文などが続いた。

「後者」の場合は、初齋から六齋に至るまで、式順などがほぼ同一であり、場所だけ中央本部で行なわれた。

(3) 終齋

四十九日には終齋式が行なわれた。同じ「教団葬」に該当する葬儀であっても、「前者」と「後者」は各々主管機関である円仏教ソウル会館と中央本部の半百年記念館でそれぞれ行なわれた。また、参加者などに異なる面があった。終齋について『円仏教礼典』には、

涅槃後、四十九日（七七日）になったら、終齋を行なうが、その式は、開式、入定、略歴

報告 法供の歌 献貢および齋主告辞、心告および一同拝礼、聖呪および念仏、薦度法門、読経および祝願文、説法、一般弔客の焼香、除服および告由文、献貢報告、慰霊歌（聖歌44、52、148章等）、閉式の順です。終齋の説法は、場合によっては、薦度法門のつぎ、読経の前に行なうのもよく、その内容は該当する法語を朗読するか、あるいは、その時の法師が涅槃人の実情にあうように願力と薦度と回向と因縁等に関する道を主として説く⁶⁵。

とある。

終齋式の告辞は、前者の場合、2009年（円紀94）7月30日教徒代表として莊陀円金恵田教徒（江南教堂）が担当し、校舎は同年7月19日寧山金詳益教務が法身仏の前で読んだ。終齋式が終わると、一般教徒の葬儀であっても、「教団葬」による葬儀であっても、各々の教堂の中の永慕施設に祭られることが多い。今日、大部分の教堂はまだ円仏教的な永慕施設を設けてない。しかし、「教団葬」による葬儀の場合は中央本部の永慕殿に祭られた。これは、追悼・服喪・除服の礼を行なう場合便利な面があるからである。さらに、同志・教友等の関係もさまざまであり、故人で自発的に服喪することとは制限しないというのが、円仏教関係者の説明である。

一方、すべての円仏教的な永慕施設のなかで、最近では、中央本部の永慕殿⁶⁶（写真22A,B）の以外にも全羅北道の益山市の宮洞教堂（写真23A,B）をはじめ、東永教堂・文化教堂、全州市の西新教堂（写真24）・平和教堂・仁厚教堂、そして、群山市の群山教堂などでは、教堂別のお円仏教的な永慕施設を設置している。さらに、釜山教区の東萊教堂、仁川京畿教区の議政府教堂などにも永慕施設を設置している。これらは時代の趨勢であろう。

特に、上に挙げた教堂のうち、全州市の西新教堂で勤務している蘇中覚教務らは、直接そのような作業をしている。毎日早朝には、西新教堂で涅槃した教徒はもちろん、教徒の親戚たちが祭られた同教堂において、靈魂のための「祈り」をしているそうである（写真25）。特に、蘇中覚教務は、「これからは各々の教堂の中の永慕施設に祭られることになるし、そのスピードは日増しに加速していくと予想される」と筆者との話し合いを通して自分の考えを表明していた（写真26）。

さらに、群山教堂の場合を見てみると、2009年10月25日、同教堂創立60年記念法会が開かれ、第1部の永慕殿奉仏式や第2部群山教堂60年創立記念法会などが行われた。（写真27A-C）このような動きは、上述したいくつかの教堂で見られる。

たとえば、全州市の西新教堂と群山市の群山教堂などでは円仏教式の位牌を製作するために、木で作られた位牌の製作のための機械（写真28）を準備しており、隣の教堂から要求があった場合には、それを支援する計画を立てている。こうしてみると、教堂別の円仏教的な永慕施設というのは、今後も増えていくと言えよう。

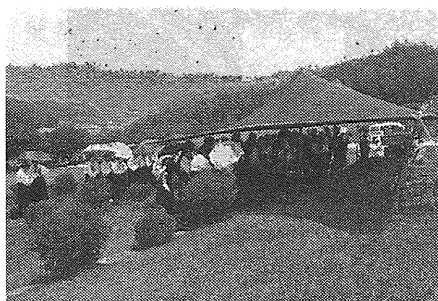
全州市の西新教堂側が発表した資料、「西新教堂の永慕施設（永慕殿）の造成の目的と意義」によると、ここでは、1,300位を安置できる永慕殿を設置している。その目的と意義は、「a）涅槃人と先祖の薦度のため、b）家族の子孫（遺族）たちの教化（済度）のため、c）親孝行を実践することによって、先祖たちの遺業を継承し、その恩に感謝する心構えを身につけるため」で



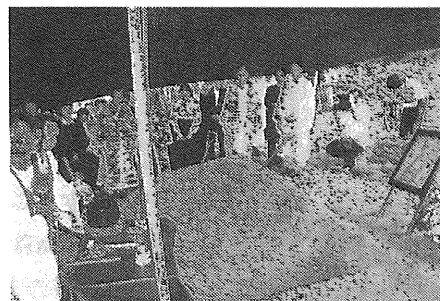
写真：20-D



写真：21-A



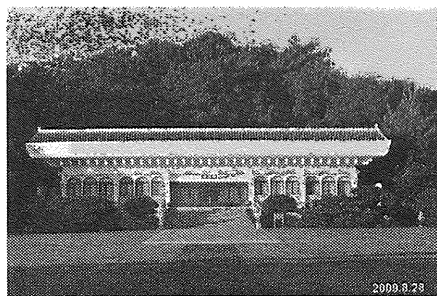
写真：21-B



写真：21-C



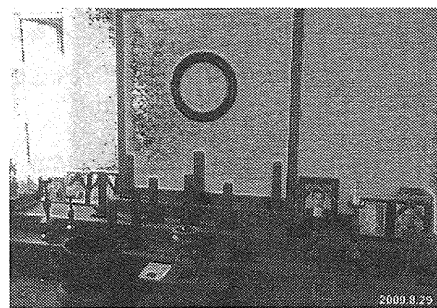
写真：22-A



写真：22-B



写真：23-A



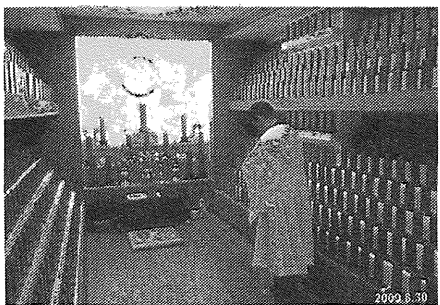
写真：23-B



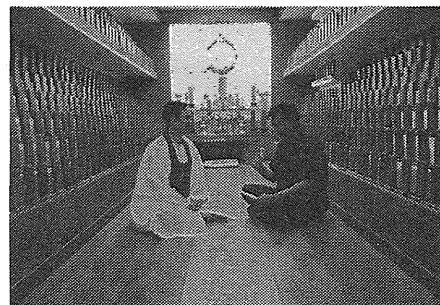
写真：24-A



写真：24-B



写真：25



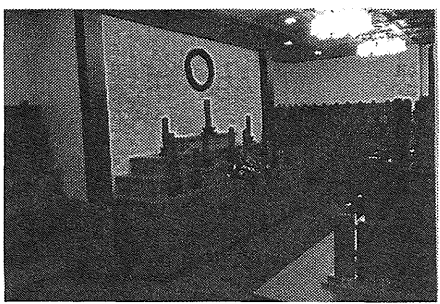
写真：26



写真：27-A



写真：27-B



写真：27-C



写真：28

ある。

(4) 齋に関する処理

齋の場所は教堂を原則とするが、終齋から六齋までは自宅の霊位奉安所の清潔と心身齋戒に始終留意する。そして、教堂・自宅を問わず齋を挙げる時には、常に主礼の指導によって行なうのが普通である⁶⁷。

4. 円仏教の「二齋」

円仏教における一番大事な法要行事は、四祝⁶⁸（行事）と呼ばれる新正節・大覚開教節・釈尊聖誕節・法認節と、二齋（行事）と呼ばれる六・一大齋や名節大齋などがある。このなかで、前者の新正節・大覚開教節・釈尊聖誕節・法認節は祝祭日であり、後者の六・一大齋と名節大齋は祭司の一種である。

ここでは、四祝については省略して、二齋だけについて探してみる。

二齋とは、少太山大宗師以下円仏教の先祖すべてを末永く追慕するため定例的に合同献祭することである。これは追遠報本の礼を実行することで、毎年二度献祭することになっている。6月1日の六・一大齋と12月1日の名節大齋に永慕殿において、少太山大宗師をはじめとする歴代先祖の各霊位を共同献祭することにより、全ての教徒が心を合わせて誠をささげ、威儀を正して法系香火を末永く伝えていこうというものである。そのために、円仏教においては、総本部や各教堂を問わず、ことに事例地域である全羅北道全州・益山・群山市の幾つかの教堂の独立の永慕殿が建てられるまでは、大覚殿仏壇に臨時仏壇を設けて献祭することにしてきている。ここで、六一・大齋と名節大齋について探してみることにする。

六・一大齋（写真29）というのは、毎年6月1日の少太山大宗師の涅槃忌日に少太山大宗師をはじめ円仏教の歴代先霊列位を追慕し、定例の享礼を行なうことを指す。一方の名節大齋（写真30）というのは、毎年12月1日、アメリカなどの感謝祭のような意味で、少太山大宗師をはじめ円仏教の歴代先霊列位を追慕し、定例の享礼を行なうことを指す。

六・一大齋と名節大齋は、「大齋奉請」が行なわれた後に各々の式順に従って行なわれる。ここでは、「告祝文」のほかに、「円仏教聖歌」のうち、告祝文にふさわしいとされる聖歌が歌われる。六一・大齋と名節大齋の大齋奉請で読まれるのは、次のようなものである。

「奉請」一円大道を大覚され一円大業を創建された円覚聖尊大宗師少太山如来位。私たちは揃って一心をこめ謹んで招魂しますので、どうぞこの道場に降臨されてこの微誠に感応してください。

「奉請」一円大道を継承し一円大業を運転された伝仏心宗法輪常転宗師位。一円大道を奉讃し一円大業を護衛された広行仏事化被大衆大奉道位、大護法位。一円大道を奉戴し一円大業を専務された貢献仏事無我奉公専務出身各等位。一円大道を信奉し一円大業を協賛された協賛仏事護法奉公巨鎮出塵各等位。一円大道を發願しこの会上に共に参加した普通出家教徒位、普通在家教徒位。

「奉請」聖位子女を生育されたこの大業に喜捨された啓生聖子援護大業喜捨各位。等内教徒を生育され共に参加した教徒の根源であらゆる追遠感慕歴代先祖一般父母先祖位。

「奉請」大道大徳を証得され済生医世を先唱された同源道理円通万法先聖各位。この大斎の因縁によりこの大道に回向される同気連契六道四生一切生霊位。私共一同は一心をこめ謹んで魂道しますので、この道場に降臨されたこの微誠に応じてください⁶⁹。

つづいて、告祝文が読まれるが、本論文は円仏教における「教団葬」と「葬送儀礼」がキーワードになっているので、「大宗師に対する告祝文」・「宗師に対する告祝文」・「大奉道・大護法に対する告祝文」などいくつかを選んで紹介する。これらは、円仏教における「教団葬」で行なわれた葬儀のある場合に該当するからである。

「大宗師に対する告祝文」

円紀〇〇年〇〇月〇〇日、私共教徒一同は斎戒し、大宗師性霊の前に謹んで申し上げます。そもそも世の中には道徳があるために人の精神は開拓され、道徳は仏がおられるので開明され、仏は会上があるのでその光明を広く及ぼすことができるので、仏の光明は世の中の灯火であり衆生の精神的生命です。ああ、靈山会上が過ぎ去って三千年、東西各地に聖者の足跡が絶えてひさしく、まことの教化は行なわれず、正しい法は受け入れられず、物質文明の発達に極度に達した反面、精神の勢力はますます衰退し、世の中は形式の仮面で粉装し、人は貪欲の溝に陥り、天下の形勢は大きく亂れ、蒼生の塗炭の苦しみはますます激しくなりました。(中略)

私供は幸いにも宿世の因縁で早くから宗師の法下に帰依し、無量の法恩に浴し、永遠なる将来にかけてこの法を奉戴することを誓い、今日心香一筋を手向けて報恩の誠を捧げますので、大宗師の聖霊よ、ご照鑑ください⁷⁰。

「宗師に対する告祝文」

円紀〇〇年〇〇月〇〇日、私共教徒一同は斎戒し、宗師皆様の性霊の前に謹んで申し上げます。

そもそも天地は四季が循環し、日月が代わり合って照らすので、万物は永遠なる生成の恩を受けるのであり、世の中は聖者が後を継いで現われ教化が滞りなく行なわれるので、衆生は永遠なる精神の養育を得るのです。ああ、道徳が衰弱した末法危機に大宗師は新しい時代を創建なさり、済生医世の広大な道をもって闇につつまれた生霊に新たな光明を与えられ、後を継ぐ歴代宗師各位はその宗統を正しく伝え、その教義を明らかにして無限の歲月にかけて仏日を一層輝かし、法輪をさらに進ませられたことは真に尊いことです。(中略)私供は幸いに尊い会上に参加して限りない法恩に浴し、永遠なる将来にかけてこの法輪から離れないことを誓い、今日心香一筋を手向けて報本の誠を尽しますので、歴代宗師の聖霊ご照鑑ください⁷¹。

「大奉道・大護法に対する告祝文」

円紀〇〇年〇〇月〇〇日、私共教徒一同は齋戒し、大奉道・大護法の尊靈の前に謹んで申し上げます。

そもそも人は靈肉双全でなくては能く円満な生活を維持することができず、会上は理と事が並進しなければ能く完全な教化をすることができないので、いつの時代を問わず、済生医生の尊い会上が開かれる時には必ず教化を主宰する法の主人があると同時に、またその教化を広く宣揚し、法をよく護衛する事業の主人があるものでこれにより理と事の両面が同じ力でその会上の威信を広く世に発揚するのが古今の通例です。我が会上では大奉道・大護法の各位がその大任を果たされました。(中略)

私たちも幸に尊いこの会上に参加して、残された恩に浴し、神聖なるこの事業を永く継承することを誓い、感謝の誠を捧げますので、大奉道・大護法の尊靈よ、ご照鑑ください⁷²。

そのほか、場合によっては、「専務出身に対する告祝文⁷³」・「喜捨位に対する告祝文⁷⁴」も大事にする。

以上のような告祝文以外にも、居塵出塵前告祝文、普通出家在家教徒前慰靈文、一般父母先祖前告祝文、そして最後には先聖位・先靈位前の焚香があるが、これらの告祝文は円仏教の「教団葬」ではない場合行なわれる。一方、あらゆる告祝文の直後には円仏教聖歌の中で最もふさわしい聖歌が讃頌される。

さて、韓国における新宗教としての円仏教は、その「故郷」である韓国ではもちろん、円仏教が伝わる地域ならばどこであっても行なわれる。たとえば、日本教区の横浜教堂においても、六大陸のほかの地域においても行なわれている。

2010年(円紀95)12月1日に益山市の円仏教中央本部で行なわれた名節大齋について見てみると、その式順は次のようであった。なお、六・一大齋の場合もその式順はほとんど同じである。

- (1) 開会
- (2) 教歌(聖歌2章)
- (3) 黙想心告
- (4) 廟位報告
- (5) 「奉請」および「告祝讃頌」(次のように各位号を奉請すると、人々は一斉に礼拝する。聖歌は各々第1節のみを歌う)
 - 1) 大宗師前告祝文…讃頌(聖歌6章)
 - 2) 宗師位前告祝文…讃頌(聖歌7章)
 - 3) 大奉道/大護法位前告祝文…讃頌(聖歌8章)
 - 4) 専務出身前告祝文…讃頌(聖歌9章)
 - 5) 居塵出塵前告祝文…讃頌(聖歌10章)
 - 6) 普通出家在家教徒前慰靈文…讃頌(聖歌18章)
 - 7) 喜捨位前告祝文…讃頌(聖歌11章)

- 8) 一般父母先祖前告祝文…讃頌（聖歌47章）
- 9) 先聖位/先靈位前讃頌…（聖歌75章、第3節まで）
- (6) 一同献拝
- (7) 一般焚香
- (8) 読経（一円相誓願文）
- (9) 敷衍璣法
- (10) お知らせ
- (11) 閉会

などである。

これらのあらゆる式順のうち、円仏教中央本部の教政院（写真31）の総務部による公文「円紀95年名節大斎の廟位報告」があり、これは韓国は勿論、海外の教堂でも発表された。その公文によれば、本座は6,009位であり、別座は7,107位であり、総入廟数は13,116位であった。「円紀95（2010）年名節大斎の廟位報告」は、この資料が作成された後に増えた入廟数を記載していないため、円仏教中央本部教政院の総務部からの新資料では、元の報告書とは去年のように相変わらず多少の隔たりがあった。いうまでもなく、これらの隔たりは早急に修正されなければならないと思う。

5. 教儀

(1) 教儀について

教儀とは、すべての儀礼を施行するにあたって教団の面目と儀式の威儀を表わすために必要な教旗・教服・教具とその他の道具等を総称するものである⁷⁵。これらすべての教義の製作と施用規例は一定にし、すべての威儀と儀式は矛盾や混乱のないようにすべきである。

(2) 教旗

教旗は、円仏教教団の象徴であり、その製材・寸法・色彩等は教規に合うように造るべきで、旗竿・旗頭も法のとおりに製作することが求められる。また、「教団葬」などにおいて、教旗を半旗で掲揚する場合や他宗教の旗・他団体の旗と一緒に掲揚する場合には、国旗と外国旗とともに掲揚する場合の一般的慣例による⁷⁶。だから、満陀円金明煥宗師と元山李済性宗師らが涅槃して全般的な葬儀が「教団葬」で行なわれた時、ずっとこの教旗は揚げられた。

(3) 教服

教服とは、常住道場や法要行事に威儀を正す円仏教教団の礼服を指す。教服と法絡⁷⁷の2つがあり、平常の行事では教服のみをまとうが、特別行事には教服の上に法絡を加えて着用する⁷⁸。（写真32）また、教服と法絡はその材料・寸法・色彩等を教規の通りに製作するべきとされる。なお、教服と法絡の着用は、その時期・範囲などを教規の通りにする。

だから、満陀円金明煥宗師と元山李済性宗師らが涅槃してから「教団葬」で葬儀が行なわれる時、涅槃式・告别式・入棺式・初斎から終斎に至るまで、そして、六・一大斎と名節大斎など

ほとんどの行事には主礼を進行する教務たちはこれらを着用して、円仏教的な独特な雰囲気が漂うようにした。

(4) 教具

教具は仏壇の威儀を整えるために仏前に備える道具と、法要行事の際に使用する法要道具、特別法要行事の際、臨時に使用する荘厳道具という3つを指す。なお、法要道具とは、経床・木鐸（写真33）・坐鐘（写真34）・竹篋（写真35）・揺鈴および清水器（写真36）等を指している。さらに、すべての教具はその規格や様式・色彩を教規の通りに統一すべきであるとされる。特別法要の式場を装飾するにあたっては、その時期に一般的に行なわれる装飾様式を採択することもあるが、その色彩は公儀を経て適宜に決定する⁷⁹。一方、満陀円金明煥宗師と元山李濟性宗師らが涅槃して「教団葬」で葬儀が行なわれた時も、木鐸・坐鐘・竹篋などは欠かせない教具として頻繁に使われた。

(5) その他の教儀

教標とは、教徒の標識を指しており、教規の定める通りに製作し、すべての教徒が上衣左側の胸につける。これについては、前述した通りである。

すべての儀式において、法身仏と永慕殿に対する礼拝は「四拝」であり、一般的靈前では「二拝」、その他では単拝を「大礼」で行なうのを原則とするが、場合によっては「略礼」ですることもあり、『円仏教礼典』の該当する式順に特別な規定があればそれに従う⁸⁰。

さらに、すべての儀式において法位のある英霊に対しては、位牌（写真37）や例文等に法号・法名・法階または法勳を記し、たとえ法階正師の英霊であっても、①死後特例によって追尊されたり、②甚だしく衰えて涅槃に入ったり、③急病または事故によって突然涅槃に入ったりした場合には、薦度法門を朗読する。

おわりに

筆者は、本論文の「韓国の円仏教における「教団葬」という葬送儀礼」を通して、円仏教の数々の書籍を参照し、円仏教における生死観を考察することは勿論、円仏教の葬儀においても多くの宗教と同様に、『祈り』を中心とする葬儀」というものがあるので、円仏教において儀礼がかなり重要視されるということから、宗教のあらゆる機能の中でも「儀礼」が重要な役割を果たしていることを明らかにして、円仏教における葬儀の原理と実際について民俗学的に探ってみた。日本の学術誌において、こういうテーマの論文は今まで皆無であった時点で本論文を記すことは、筆者として多少でも甲斐のあるところであった。

現在の韓国人の意識は、未成熟であった20世紀の韓国におけるそれと同じではないし、死亡年齢が以前にも増して上がっているのである。これらによって、現在の韓国における具体的な社会変革の根本的問題とは、さしあたっては、マスメディアや宗教などの市民的なあらゆる組織におけるヘゲモニーのほうの問題になるということについては冒頭で述べた通りである。しかし、上述の事柄は、宗教に関わるさまざまな分野であると考えられ、さらに一歩進んで考えて



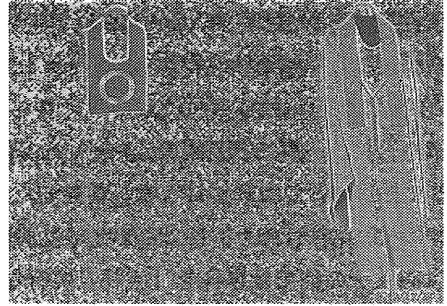
写真：29



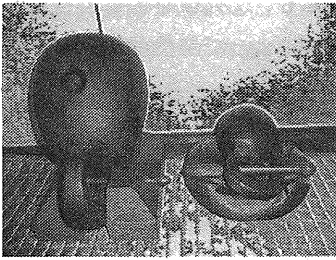
写真：30



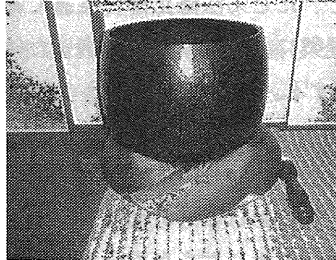
写真：31



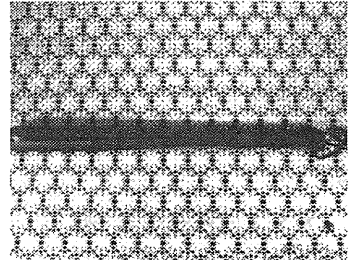
写真：32



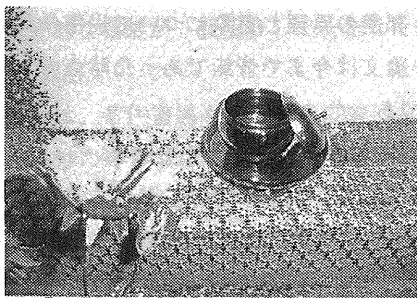
写真：33



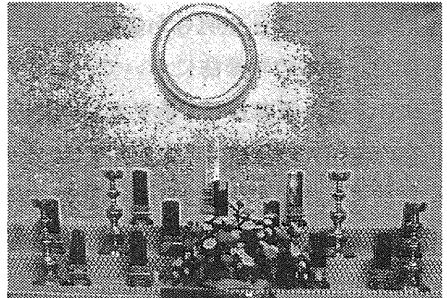
写真：34



写真：35



写真：36



写真：37

みれば、宗教それ自体を取り巻く「葬儀」と「墓地」の問題であるといえよう。このうち、「葬儀」の問題は本論文のタイトルのように韓国の円仏教における「教団葬」という葬送儀礼を多少でも具体的に紹介することができたが、韓国における「墓地」の問題は、国土に比べれば、今日も金明煥・李済性宗師の葬事を通して分かるように、土葬が行なわれているところを考えると深刻なことである。たとえ韓国の国土がいくら狭いと論じられても、円仏教における「教団葬」という葬儀でアプローチしても国のための貢献などはほんの少ししかできなかつたと言わざるをえない。それは、満陀円金明煥宗師と元山李済性宗師らが涅槃してから行なわれた「教団葬」での葬事は土葬であつて、たとえ円仏教における土葬による墓の面積が他の墓地より狭くて簡潔なところがあるといつても、筆者としてはたいへん惜しい点であつた。

以上の内容を踏まえ、筆者は、調査の対象地域をなるべく韓国全羅北道の全州・益山・群山市と定め、可能な限り現場へ出向き、直接参加したことで得られた事実に基づいて研究の範囲と研究の方法を決定した。もちろん、これを通して関連する参考文献もきわめて重要な資料であることを感じる契機ともなつた。ところで、場合によっては、調査の対象地域以外のソウルをはじめ他の都市の円仏教と関連のある施設をフィールド調査したこともあつた。というのは、筆者が主として日本の横浜で暮らしながら本論文を記したので、たびたび訪韓の出張ができないケースがあつたという点が作用されたところもある。ただ、フィールド調査こそ、民俗学的な研究において導入しなければならない研究方法であるということにより胸深く感じることはできた。

本論文で発表した研究を整理してみると、調査の対象とした地域の事例を具体的に紹介できたことについては多少満足しているが、調査対象地域でも場合によっては一人の故人に対するすべてのフィールド調査ができなかつたことがあつたので、もう一人の故人のフィールド調査が必要だつた。それで、「前者」の満陀円金明煥宗師の葬儀を最初の調査の対象としたが、「前者」では告別式の直後から終齋までの過程に関するフィールド調査が不可能だつたので、出棺葬列の前後事項は「後者」の元山李済性宗師の葬儀の一部を調査の対象とした。いうまでもなく、円仏教と関係のある教徒と教役者が涅槃すると、「教団葬」で葬儀を行なわれたことは、以上の「前・後者」の以後（2009年から）にも何件もあつた。ここで、筆者は「前・後者」を調査の対象としたことについて考えてみると、在家教徒と出家教役者の両面に関する研究ができた面でも有意義のことであつたと思う。それでも、一方では、調査の対象ではない地域について探つたことや、より实际的に研究ができなかつたという点について、さらに充実した内容を研究することができなかつたと感じられる点については、無念でならない。

筆者は、こういう考え方からなるべく現場でのフィールド調査をし、民俗学的な研究方法の重要性を胸深く感じることができた。ところが、筆者が円仏教の横浜の教堂で勤務している立場で、こういう分野を研究するのが個人的には望ましいことであると考えた。しかし、円仏教というものは何であるか今も知らない人々が多いため、筆者が円仏教の人々の葬送儀礼に関するところを具体的に論ずることは容易な作業でなかつた。それゆえ、非文字資料である地図や

写真などを利用したわけである。

一方、筆者の周囲には円仏教の人々が多い面があるので、死亡してあの世に行かれる人が少なくない。そのうえ、一昨年(2009年)9月と10月は、筆者の父が亡くなり⁸⁾、亡者の遺族としてとても近いところで体験したことを振り替える必要性をつくづく感じられるようになった。

-
- ¹ 生れてから死ぬまでの、すべての儀礼を含むもので、内容も多岐にわたっているが、一般には、妊娠・出産・結婚・厄年・年祝い・死などのそれぞれの機会に行なわれる儀礼を総括する。(井之口章次、『人生儀礼(講座 日本の民俗3)』、有精堂、昭和53、1頁)
- ² 吉田禎吾、『宗教人類学』、東京大学出版会、1984、59頁
- ³ 勿論、このような主張は、ずいぶん以前のものであるが、今日の韓国の火葬率などの現状を考えてみると、説得力がないわけではない。
- ⁴ 井之口章次、前掲書、22頁
- ⁵ 由谷裕哉、(特集：日本民俗学の研究動向2000-2002)「信仰一世紀の変わり目における信仰・宗教の研究一」、『日本民俗学』(第239号)2004、8、日本民俗学会編、90頁。
- ⁶ 張長植、「韓国民俗の歴史と展望に関する省察」、国立歴史民俗博物館編、『国立歴史民俗博物館 国際研究集会一 韓国の民俗学・日本の民俗学一』、2005.9、1頁
- ⁷ 印権煥、『韓国民俗学史』、悦話堂、1978、20頁。
- ⁸ 「東学」の教祖であり、本館は慶州、号は水雲^{ヌンウ}あるいは水雲齋である。
- ⁹ 「西学」と呼ばれた。
- ¹⁰ 朝鮮時代には、身分を重視する封建的な儒教の理念が主として行なわれ、その結果、両班^{ヤンバン}たちは、豊かに暮らした半面、農民たちは、世知辛く暮らしたのである。しかし、朝鮮後期、このような状況を克服して全国の民たちが順調に暮らせる国に変えるため、何人かの学者たちは、実用的な学問を研究すべきことである発想ができ、これがほかならぬ「実学」というのができた経緯である。
- ¹¹ 本館は羅州であり、号は、俟菴・籟翁・紫霞道人などであった。
- ¹² 杉山幸子は、『新宗教とアイデンティティ(回心と癒しの宗教社会心理学)』の「はじめに」をとおして、「新宗教はある意味で宗教のイメージを代表するものだが、『宗教ではない』されることも多く、新宗教と思われている集団の人たちが『自分たちは宗教じゃない』ということもある。また、最近、書店で『精神世界』に関する本をよく目にするが、これは宗教なのか、そうでないのかという疑問を抱いたことのある人もいるだろう。」と述べている(杉山幸子、『新宗教とアイデンティティ(回心と癒しの宗教社会心理学)』、新曜社、2004、はじめに)が、以上の考え方が隣国の韓国にもないことではない。けえども、筆者は、一つの新宗教として「円仏教」のことを本稿の事例の対象としている根拠は、いわゆる近代という時期に創教され、今日まで存続されて韓国社会に「四大宗教の一つ」として宗教的な役割をしているところをたびたび目にし、直接体験したことがあるから、この地球村に韓国からの新

宗教の「円仏教」というものがあることを記したいのが筆者の正直な考え方である。

- ¹³ 「円仏教」というのは、韓国人である朴重彬（1892-1943、法号：少太山、尊称：大宗師）によって創教された新しい仏教であるといえよう。一方、円仏教についてより詳しく理解するためには『比較民俗研究』第24号、2010年3月、比較民俗研究会、123-154頁に掲載されている筆者の論文である「現代韓国の円仏教の人々の祈りと暮らし— 全羅北道<益山市新龍洞>の‘四恩’信仰・日常生活の事例を中心として—」を一読するとできると思うしだいである。
- ¹⁴ 南根祐の「韓国民俗学の現在」、『日本民俗学（特集：海外の現代民俗学—東アジア編）』（第259号）、2009. 8、日本民俗学会編、5-27頁。
- ¹⁵ 李承洙の「韓国における現在の民俗学状況」、『日本民俗学（特集：海外の現代民俗学—東アジア編）』（第259号）、2009. 8、日本民俗学会編、82-110頁。
- ¹⁶ 山田慎也の「現代における葬送儀礼調査と倫理」、『日本民俗学（小特集：民俗学と研究倫理）』（第253号）、2008.12、日本民俗学会編、100-109頁
- ¹⁷ 『円仏教教典』の「正典」の第3 修行編の第17章法位等級に、①普通級 ②特信級 ③法魔相戦級 ④法強降魔位 ⑤出家位 ⑥大覚如来位などがあり、「宗師位」は ⑤の「出家位」と同級にあたる。『円仏教教典』、円仏教出版社、円仏教教化部、円紀91年（2006）、89-90頁。
- ¹⁸ 『円仏教礼典』、円仏教出版社、円仏教教化部、円紀85（2000）年、13頁。
- ¹⁹ 「円仏教」と「仏教」の差異というのは、何よりも異なる教祖・教理・教団として分類されているという点を円仏教の側が強調しながら、円仏教は「時代・大衆・生活化」されたの仏教であるために過去の「仏教」とは異なる面をもつ革新的な仏教だと主張する反面、教祖であるソテサン少太山大宗師（パク朴ジュンビン重彬、1891-1943）が円仏教を創始した時、仏教に淵源をおいたという根拠をもち、同時に「仏教」との共通点をもつことを示唆しているために生まれるものである。
- ²⁰ 『円仏教教典』、「大宗経」因果品1章、円仏教正化社、204頁。このような道理は、少太山が直接著述した『円仏教教典』（2006）のなかの「正典」の第2教義編、第1章の「一円相」の中に一応も二応もとられている。
- ²¹ 同上、261頁。
- ²² 梨花女子大学校韓国学科教授
- ²³ 「円仏教新聞」、円紀95年（2010）10月22日、11面参照
- ²⁴ 『円仏教教典』、261-262頁。
- ²⁵ この「臨終」の意味は、さまざまであるが、ここでは、人間の死の直前の時期を意味づけている。
- ²⁶ 少太山は、「近親者の注意事項」をこれ以外にも六つ提示している。
- ²⁷ 『円仏教教典』、262-263頁。
- ²⁸ 少太山が直接作った「漢文」として、これは、円仏教式の葬儀の時、故人の極楽往生のためにたびたび暗誦される一つの呪文である。『円仏教教典』の「大宗経」薦度品4章にも掲載さ

れている。(同上、264頁)

- ²⁹ 人間の本性を指す。
- ³⁰ 上掲書、264-265頁。
- ³¹ この「薦度法門」は、そもそも「涅槃前後に後世を引導する法説」とよばれている。これは、二種類があり、一つは原本文であり、もう一つは敬語文である。
- ³² 『円仏教教典』、薦度品6章、円仏教正化社、2006、265-266頁。
- ³³ 日本における「四十九日」と同じ意味である。
- ³⁴ 『円仏教礼典』 2000(円紀85)年、終齋祝願文、円仏教正化社、146頁。
- ³⁵ 『鼎山宗師法語』 2000、「世典」第9章 涅槃、円仏教正化社、37頁。
- ³⁶ 同上、37-38頁。
- ³⁷ 同上、367頁。
- ³⁸ 同上、367-368頁。
- ³⁹ 同上、367-368頁。
- ⁴⁰ 『鼎山宗師法語』、369-370頁。
- ⁴¹ 円紀65(1980)年発刊された『円仏教礼典』には「教会葬」と表記されている。だから、「教会葬」が「教団葬」でその以後変わったわけである。
- ⁴² 『円仏教礼典』、円仏教出版社、円仏教教化部、円紀65(1980)年、109頁。
- ⁴³ 『円仏教礼典』、円仏教出版社、円仏教教化部、円紀65(1900)年、109-110頁。
- ⁴⁴ 同上、111頁。
- ⁴⁵ 『円仏教教典』「大宗経」薦度品2,3章、円仏教正化社、2006、261-263頁。
- ⁴⁶ 『鼎山宗師法語』「世典」第9章 涅槃、円仏教正化社、2000、36-37頁。
- ⁴⁷ 丁寧な文体として、年長涅槃者に対して用いる。
- ⁴⁸ 同上、76-77頁。
- ⁴⁹ 同上、77-78頁。
- ⁵⁰ 一般的に、「大殮」と呼ばれる。
- ⁵¹ 『円仏教礼典』、円仏教正化社、2000、79-80頁。
- ⁵² 葬礼で棺をのせた車を挽く者たちの歌う一種の歌を指す。
- ⁵³ 『円仏教礼典』、円仏教正化社、2000、78-79頁。
- ⁵⁴ 同上、79-80頁。
- ⁵⁵ 主に、円仏教におけるターミナルケア病院としての役割をする所である。
- ⁵⁶ 独立運動家の金丸の自叙伝である。
- ⁵⁷ 『円仏教礼典』、円仏教出版社、2000(円紀85)109-110頁。
- ⁵⁸ 「円仏経礼展」、円仏教出版社、2000(円紀85)、79-80ページ。
- ⁵⁹ 『円仏教礼典』、円仏教出版社、2000(円紀85)、
- ⁶⁰ 同上、79-80頁。

- ⁶¹ 同上、82頁。
- ⁶² 『円仏教用語辞典』、孫正允編、円仏教出版社、1980年、454頁。
- ⁶³ 同上、520頁参照。
- ⁶⁴ 『円仏教礼典』、円仏教出版社、円仏教教化部、円紀65（1900）年、82-83頁。
- ⁶⁵ 『円仏教礼典』、円仏教出版社、円仏教教化部、円紀65（1900）年、83-84頁。
- ⁶⁶ 少太山大宗師以下円仏教の歴代先靈列位の位牌を祭っておく廟宇であり、1971年（円紀56）円仏教中央本部に建立された。（『円仏教用語辞典』、孫正允編、円仏教正化社、1980、367頁参照。）
- ⁶⁷ 『円仏教礼典』、円仏教出版社、円仏教教化部、円紀65（1900）年、85頁。
- ⁶⁸ 四祝は、本稿で中心的な位置を占めるものではない。しかし、円仏教の法要行事を理解するために、四祝は二斎とともに重要な要素であり、ここで両者について探ってみることは有意義であると思われる。
- ⁶⁹ 『円仏教礼典』、大斉奉請、円仏教正化社、1980、167-168頁。
- ⁷⁰ 同上、168-169頁。
- ⁷¹ 同上、169-170頁。
- ⁷² 同上、170-171頁。
- ⁷³ 円紀〇〇年〇〇月〇〇日、私共教徒一同は斎戒し、専務出身各等位の尊霊の前に謹んで申し上げます。

そもそもこの世は、聖人でなくては能く衆生を済度することができず、聖人はまた真実の同志がなければよくその会上を建設することができないので、真実の同志こそ会上の中心であり済度の門です。いつの時代を問わず、尊い会上が開かれ立派な法が伝えられる時には必ず聖人に仕える輔弼の士と心腹の人が継続して出現し、心を繁ぎ気運を合わせて悪道衆生を広く済度し、病んでいる世上を永い間治療しました。皆様は昔の会上の因縁で大宗師の法下に馳せ参じ、あるいは建設時代にあるいは守成時の代に各々の因縁に従い機会に応じてこの大道事業に直接専務される時、自身の栄辱と私家の興廃を顧みず、ひたすら純一な誠をもって心は会上に身は公衆に捧げ、どんな辛苦や逆境難関にぶつかってもこれに耐え、超然としてあるいは東にあるいは西に、あるいは寒さあるいは暑さに精神をいため汗を流しながらも、これを義務と思い楽しみになして、無我奉公の大儀を貫徹されたのです。

専務出身として心をつにし、力をあわせられた皆様の結合がなかったならば、この会上はいかにして建設され、たとえ建設されたとしてもいかにして長久なる時日に亘り継続的發展をすることができたでしょうか。皆様のただ一団の赤誠が天地をも感動させ、燦然たる功德が日月よりも輝かしいお陰でなくて何でしょう。

私たちが幸にこの尊い会上に参加して、後世までも残された恩恵に浴し、神聖なるこの遺業を永く継承することを誓い、ここに感謝の誠を捧げますから専務出身各等位の尊霊よ、ご照鑑ください。（同上、172-173頁参考）

⁷⁴ 円紀〇〇年〇〇月〇〇日、私共教徒一同は斎戒し、大喜捨・中喜捨・小喜捨の皆様の尊霊の前に謹んで申し上げます。

そもそも大海長川も根源があつてこそ洋々たる蒼波をなすのであり、泰山喬嶽も祖宗があるので連綿たる峰勢を造るのであつて、大道が創設され法海が永く流通するのは、実に喜捨位皆様が聖子を啓生して大業を援護された尊い功德に根源しているのです。喜捨位皆様は早くから広済衆生の大義を考えられて、大宗師以下歴代諸聖諸賢等聖子をお生みになり、誠と慈しみを傾けて養い教えられて本教に喜捨され、仏日祖灯を綿々として相続し法系玄風を振興されました。喜捨位皆様の功德がなかったとすれば今日我が会上光明発揚されることができ、また私供はいかにして神聖なる救済を得ることができるでしょうか。

そこで、大円正師・円正師正・師等賢聖を生み育てて喜捨された皆様に、大喜捨・中喜捨・小喜捨の尊位を奉呈し、後孫万代にいたるまで本教の先祖として永く奉戴し、今日心香一筋を手向けて報本の赤誠を捧げますので、大喜捨・中喜捨・小喜捨の尊霊よ、ご照鑑ください。(同上、175-176頁参考)

⁷⁵ 同上、115-116頁。

⁷⁶ 同上、16頁。

⁷⁷ 教務が儀式を行なう時、教服の上にかけるものとして、正面に円「〇」が描かれている。

⁷⁸ 『円仏教礼典』、円仏教出版社、円仏教教化部、円紀65(1900)年、116頁。

⁷⁹ 同上、117頁。

⁸⁰ 同上、118頁。

⁸¹ 筆者の父は2009年9月30日涅槃し、同年10月2日に「告別式」が行なわれ、同年10月3日には日本のお盆のような韓国の秋夕(チュソク)があり、この日初めての祭祀(涅槃記念祭)を行われ、同年11月17日には終齋式(日本の「四十九日」)を行なわれた。これについては、拙論(2011.3)147頁の「現代韓国の円仏教における一般教徒の葬送儀礼—全羅北道益山市の葬儀に関する原理と実際を中心として—」『歴史民俗資料学研究』(第16号)、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、99頁参照。

参考文献

井之口章次(昭和53)、『人生儀礼(講座 日本の民俗3)』、有精堂

杉山幸子(2004)、『新宗教とアイデンティティ(回心と癒しの宗教社会心理学)』、新曜社

由谷裕哉(2004.8)、「信仰—一世紀の変わり目における信仰—」、『日本民俗学(特集:日本民俗学の研究動向2000-2002)』(第239号)、日本民俗学会編

吉田禎吾(1984)、『宗教人類学』、東京大学出版会

山田慎也(2008.2)、「現代における葬送儀礼調査と倫理」、『日本民俗学(小特集:民俗学と研究倫理)』(第253号)、2008.12、日本民俗学会編、100-109頁

南根祐(2009.8)の「韓国民俗学の現在」、『日本民俗学(特集:海外の現代民俗学—東アジア編)』

- (第259号)、日本民俗学会編
- 李承洙 (2009.8)、「韓国における現在の民俗学状況」、『日本民俗学 (特集：海外の現代民俗学—東アジア編)』(第259号)、日本民俗学会編
- 曹起虎 (2009.3)「明治期の葬送墓制における特徴の諸相」『比較民俗研究』(第23号)、比較民俗研究会、198—211頁
- 曹起虎 (2010.3)「現代韓国の円仏教の人々の祈りと暮らし—全羅北道<益山市新龍洞>の‘四恩’信仰と日常生活の事例を中心として—」『比較民俗研究』(第24号)、比較民俗研究会、123—154頁
- 曹起虎 (2011.3)「現代韓国の円仏教における一般教徒の葬送儀礼—全羅北道益山市の葬儀に関する原理と実際を中心として—」『歴史民俗資料学研究』(第16号)、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、99頁
- 『円仏教教典』(2006)、「正典」序品6章、円仏教正化社、94—95頁など
- 『円仏教教典』(2006)、「大宗経」薦度品1章、円仏教正化社、2006、261頁など
- 『円仏教礼典』(2000、円紀85) 円仏教出版社、円仏教教化部、年、13頁など
- 『鼎山宗師法語』(2000)、「世典」第9章 涅槃、円仏教正化社、37頁など
- 『礼典集礼輯』、円紀85、2000)、円仏教出版社、円仏教教化部、142頁など
- 『円仏教用語辞典』(1980)、孫正允編、円仏教出版社、454頁など
- 「円仏教新聞」、2009年6月19日、第1面など
- 「円仏教新聞」、2009年11月20日、第1面
- 円仏教の中のインターネットの教役者広場の「自由掲示板」、2009年05月28日13:39
- 円仏教の中のインターネットの教役者広場の「自由掲示板」、2009年08月25日11:06
- 円仏教中央本部の教政院教化部と文化社会部からの多少の非文字資料

写真説明

- 1 = 少太山の親筆、「聖呪」。
- 2 = 生前の満陀円 (マンタウォン) 金明煥宗師。
写真の左下に「宗師位」という勲章がついている。
- 3 = A ; ターミナルケア病院の「円病院」の外観
B ; 「円病院」の草分けである旋陀円 (ソントウォン) 李淨善 (イ ジョンソン) 教務 (右) と金仁眞 (キム インジン) 教務。
C ; 金仁眞教務が「円病院」の病室で末期患者たちを看病している。
- 4 = 故満陀円金明煥宗師の涅槃と葬儀案内
- 5 = 仏壇に安置された故元山 (ウォンサン) 李濟性宗師の写真。
- 6 = A ; 故満陀円金明煥宗師の斎場の201号室の入口のお知らせ。
B ; 斎場の201号室の入口の両方の弔花。

- C；故満陀円金明煥宗師の涅槃式。
- 7＝耕山宗法師が参加している故元山李濟性宗師の涅槃式。
- 8＝A；故満陀円金明煥宗師の護喪所。
- B；故元山李濟性宗師の護喪所。
- 9＝A－C；入棺の手順。
- 10＝A－F；故元山李濟性宗師の入棺の手順。
- 11＝A；当時、中央中道訓練院長だった田山（ジョンサン）金主円（キム ジュウォン）教務が弔問客の一人として故満陀円金明煥宗師の齋場で線香している。
- B；ある教務が故満陀円金明煥宗師の齋場で弔問客の訪れを迎える遺族。
- C－D；故元山李濟性宗師の齋場で弔問客たちが線香してから遺族にお礼をしている。
- 12＝故満陀円金明煥宗師の入棺が終わってからの棺布。
- 13＝故元山李濟性宗師の齋場での韓国式の「通夜」の一場面。
- 14＝益山市の中央本部のなかの半百年記念館の外観。
- 15＝A；故満陀円金明煥宗師の「教団葬」としての告別式。
- B；故元山李濟性宗師の「教団葬」としての告別式の案内書。
- C；故元山李濟性宗師の「教団葬」としての告別式。
- 16＝A－F；故元山李濟性宗師の出棺葬列の手順。
- 17＝故元山李濟性宗師の「教団葬」の涅槃標旗。
- 18＝益山市の王宮面にある永慕墓園、左上の建物は奉安堂の「大円殿」の外観。
- 19＝A；永慕墓園の中の法勲墓域。
- 20＝A－D；故満陀円金明煥宗師の遺体が法勲墓域で土葬のために移動している。
- 21＝A－B；故満陀円金明煥宗師の安葬式。
- C；故元山李濟性宗師の安葬式。
- 22＝A－B；益山市の中央本部のなかの永慕殿の外観。
- 23＝A－B；益山市の宮洞教堂の外観と内部の永慕殿。
- 24＝A－B；全州市の西新教堂の外観と内部の永慕殿。
- 25＝全州市の西新教堂の蘇中覚教務が同教堂の故人の位牌の前で祈っている。
- 26＝西新教堂の蘇中覚教務が筆者に、教堂別の永慕施設の必要性を強調している。
- 27＝A；2009年10月25日、群山教堂は同教堂創立60年記念法会で、第1部の「永慕殿」奉仏式を行なっている。
- B－C；群山教堂の永慕施設の入口と内部。
- 28＝西新教堂の蘇中覚教務が紹介している円仏教式の位牌製作するための機械。
- 29＝2010年6月6日（日曜日）行なわれた横浜教堂の「六・一大斉」の一場面。
- 30＝中央本部半百年記念館での「名節大斉」の一場面。
- 31＝中央本部の教政院の外観。

32=両方とも鼎山宗師の生存当時のもので、左のは、今日のそれとほぼ同一である。

33=法要道具の一つである木鐸は、主に念仏をする時よく使われる。

34=法要道具の一つである坐鐘。

35=法要道具の一つである竹篋は、掌にぶつかり、その音で行事の始終と式順の信号用として使われる。

36=法要道具の一つである清水器。

37=円仏教の仏壇に安置された位牌。

地図の説明

1 = 韓半島における全羅北道の位置；<http://maps.google.co.kr/maps>を参照

2 = 全羅北道の全州・益山・群山市の位置；<http://maps.google.co.kr/maps>を参照

研究消息

国際シンポジウム

「モノ」語り－民具・物質文化からみる人類文化－

2010年12月11・12日の両日、神奈川大学日本常民文化研究所・国際常民文化研究機構主催で、上記の共通テーマのもと、公開討論会「民具の文化資源化－“モノ”研究の新たな挑戦－」、国際シンポジウム「“モノ”と“ヒト”の人類文化史」が開かれた。

第一日目第一セッション「民具名称の諸問題」（司会：神野善治）では、河野通明「検索タグとしての標準名－農具の歴史を踏まえて－」、佐々木長生「民具名称のなりたち－奥会津只見の事例から－」、川野和昭「比較文化研究のための民具名称－ラオス北部と南九州の現場から－」、第二セッション「民具からみる東アジアの比較文化史」（司会：角南聡一郎）では、楨林啓介「中国文化形成の基層性と多様性」、小熊誠「沖縄と福建における亀甲墓の比較研究」、朽木量「現代民具に“消費者の生産”を読む」、第三セッション「フネとカラダ－フネの構造と漕法－」（司会：後藤明）では、赤羽正春「身体活動の延長上にある北方船の技術－アムール川のムウとオモロチカー」、板井英伸「手漕と民俗－トカラから八重山まで－」、昆政明「櫓・櫂の操作と絵画表現」の個別発表が行

われ、全体総括を小川直之が行った。

二日目のシンポジウムでは、第一セッション「人と道具」（司会：神野善治）、フランソワ・シゴー「道具と身体技法」、川田順造「道具の人間化・脱人間化、人体の道具化」、第二セッション「人と“モノ”」（司会：角南聡一郎）、徐藝乙「中国歴史文化の中の伝統手工芸」、周星「“モノ”と人間－黄河流域における花饅頭の民俗文化－」、第三セッション「人と生活」（司会：後藤明）、櫻井準也「モノから日本の近代生活を探る－階層・ライフスタイル－」、スチュアート・ヘンリ「イヌイトとアリュートの“近代化”－皮舟と犬ぞりを事例にして－」の6発表が行われた後、朝岡康二、近藤雅樹により二日間にわたる全体討論が行われた。

民具研究の意義については、すでに中国民俗学会ホームページ上で周星氏が只見町の事例をあげているが、シゴー氏は、日本の民具研究をフランスやヨーロッパで紹介する必要性を指摘。民具は、“mingu”として国際的に有効性を持つ日本発の学問研究となってきた。

(佐野賢治)